

燈明、自燈明にあるを説き、同四十三^三には、毘界の事に關せず法を宣すべく法を宣するは自燈明法燈明に基かざるべからず、此を修する者は即ち佛徒の本分を盡し佛子たるに背かざる者と説けり。その外 D. N. 輪王經^三にも、法燈明、内外身觀を涅槃經と同文にて述べ、此が魔の燒亂に遠かる所以なるを説き、S. N. 自燈經^三には、此を以て五蘊解脫の因となし、雜阿^三には見法、知法、得法、入法を以て眞信無畏となせり。さればこの教戒は佛隨平素の教訓にして、又滅後の遺囑なり。滅後の弟子にとりてはこの教訓が現實の師主に代はるべき者となれり。

自燈明の大本は不放逸にある事は已に述べたるが如し。涅槃經に佛隨が最後の言として傳ふる者の能く此意を明にし、その他不放逸の内容は諸經の示す所なり。而して不放逸とは即ち自己の中に自己の光明を發揮し發揚する事の外ならず、即ち自らを燈明とし自らを歸依とする修行の大本は、ウパニシド思想が自己の中に自己の力にて自己を實現し、又自己を光明とするを梵合一涅槃の狀態とせるのと少しも異なる事なし。自燈明の理想は梵涅槃の理想の自然の結果にして、涅槃は即ち佛隨の人格に於てその體現者を得しなり。即ち佛隨はウパニシド哲學の發揮し涵養し來りし梵涅槃の知見^三を事實に證現したる者にして、その知見は即ち教法たり眞理たる佛隨の法に現はれたり。されば自燈明は又法燈明

- (1) 尺三 30a
 - (2) D. N. Cakkavatti (暹 Vol. III, p. 63.)
同本 長阿 轉輪聖王修行經 (尺九 33a.)
" 中阿 轉輪王經 (尺五 85a.)
 - (3) S. N. XXII. 43. Attadipa (Vol. III, p. 42-43.)
同本 雜阿 二 (尺二 7a.)
 - (4) 雜阿 三十五 (尺三 108a.) 上 p. 91 知道云々參照
 - (5) D. N. Mahāparinibbāna (p. 61., R. D. VI. 10.)
Appamādena sampādettha.
長阿 遊行經 (尺九 22a.)
比丘無爲放逸 我以不放逸故自致正覺 無量衆善亦由不放逸得
 - (6) M. N. Kosambiya (Vol. I, p. 323.) に反省の六項。
長阿 遊行經 (尺九 14a.) 念不放逸 云々の偈。
この部分は D. N. に存せずしてその III. 24-42 (漢文訳) に入聖賢道 (Abhi-bhāyatana) 及入解脫 (Vimokkha) を説ける條に相當し旨意は合せり。
此の偈文は大乘涅槃經 (卷五 12.) にも存す。
- 其他參照
- S. N. 3. 2. 7-8 (Vol. I, p. 86-89.)
同本 雜阿 四十六 (尺四 70b.) 別雜 四 (尺五 22.)
S. N. 45. 108-120 (暹 Vol. V, p. 53-57.)
雜阿 三十 (尺三 82.)
S. N. 46. 31. (暹 Vol. V, p. 110.)
E. Hardy, Buddhismus (p. 62-63.)
 - (7) M. N. Anumāna (Vol. I, p. 98.) に
attanā attānam paccavekkhitabbam.
同本 中阿 比丘請經 (尺六 10ab.)
當自思慮
其他 D. N. Pottapāda (Vol. I, p. 203.)
同本 長阿 布吒樓經 (尺九 91a.) 等に
dhammo sayam abhiññā sacchikatvā
於現法中自身作證。
 - (8) Ātmani ātmanā ātmānam
Aitareya-up. 4. 1.
Chāndogya-up. 8. 7. 2.
Bṛhadār.-up. 4. 4. 23.
Gītā II. 55., III. 43.
 - (9) Bṛhadār.-up. IV. 3. 6. Ātmanā jyotiṣā.
 - (10) Vidyā, Brahmadevyā

(1) 例 Kāṭhaka-up. II. 7—9.

聖人の教師, Kusalānuçīṣṭa の語は佛教にても用ふ。

にして、その法の歸着は之を佛隨師主に求めざるべからず。且つウパニシド哲學にても、梵知見は自らの光明たると共に又他人聖人の教示を待ちて自己の中に發見せらるべし。⁽¹⁾ 佛教はこの點に於てもウパニシドの理想を完成し、佛隨は自燈明、法燈明の遺訓に於て之を明かにせしなり。而かも佛隨の滅後、その感化に代はるべき自燈明の教は、佛隨の自ら示せし實例によりて教徒を導き、その法歸依といふも、特に具象的に佛隨が一生の說法と教團の戒律とに對する信仰尊信として佛徒安立の基本となれり。此に於て、佛隨の自覺に基きて、その四法成就の菩提は真理その者、宇宙人生の究竟根底なりとの意識が佛徒の間に明かなるに及びては、真理なる法と、その法の體現者なる佛隨の人格と、その説きし教法、說法と、三者は致一不二と見做され、法身常住の觀念を生むに至れり。その此に至るまでの徑行として、師主の滅後、佛徒が師主に代はるべき歸依を求めたる跡を見るに、大別して左の三となし得べし。

- 一、佛隨の說法及びその記録を教法の本質とせし事。
 - 二、佛隨の遺物遺跡を崇拜して、その人格的追慕を活かさんとせし事。
 - 三、佛隨の再現若くは將來佛の出現を希求し設定せし事。
- この三項の傾向事實は假に分別して觀察するを要するも、事實此等の信仰、希求考

察は相助け相合して發生し發達せしなり。又此等の具象的信仰は、法身の形而上
 的信仰が成熟するに至りし迂路の徑行と言はざるべからず。されど、現實の佛
 に接したる弟子及びそれに近き人々は、直に明かに佛隨人格の形而上的意義を意
 識せず、此等の諸方面の試みの間に、漸次その究竟の意義を發揮するに至りしなり。
 且つ又法身の觀念が明白となりし後にも、此等の具象的信仰が滅せしにはあらず、
 高遠なる談理の大乗經典の中にも、尙現實佛隨の歴史を述べ、常住の法身と色壽入
 十の佛隨と相并て存せり。何れの時代何れの宗教にても、その中には一般人民の
 具象的希求と、哲人の哲學的考察と、真人の融合神祕の信仰と相交渉し又併存する
 事は必然の勢なり。佛教の此の間の歴史にても一般の信仰が現實に拘泥しつゝ、
 ありし間に、ウパニシヤド以來養ひ來りし觀念主義の哲學思想は教法の形而上的根
 底を明かにし、又淨信の人は自らの中に如來の體現を経験し、その中に佛と法との
 融合致一を觀つゝありしなり。只考察及び信仰の形而上的意義が十分成熟して
 表面に現はるゝまでには、具象的通俗的信仰は成熟して表面の勢力となれり。此
 故に此間の歴史を假に稱して迂路といひしなり。

この迂路の經過は、佛滅後その經典が編輯せられて、漸次一定の形を有するに至
 り、特に滅後百年毘舍利の會議前後より教權の思想が興りし時より、阿育王前後に

- (1) 長阿 遊行經 (灰九 14a.)
- (2) D. N. Mahāparinibbāna (p. 60 R. D. VI. 1.)
Siyā kho pan' Ānanda, tuṇhākaṃ evam assa, atitasatthukaṃ
pāvacaṇaṃ n' atthi no satthū ti, na kho pan' etaṃ, Ānanda,
evam dattābbaṃ, yo vo, Ānanda, mayā dhammo ca vinayo
ca desito
paṇṇatto, so vo mam' accayena satthū.
- (3) 長阿 遊行經 (灰九 21b.)
- (4) S. Nip. v. 330 (p. 58.)
dhamme ariyappavedite
- (5) 阿修羅經 (灰五 49). 勝波經 (灰五 51)

遺跡遺物の崇拜が隆盛に赴きし一二世紀間の大勢として見るべし。

第一。佛隨が入滅前の遺訓は、自らを光とすると共に法に歸依せよといふにありき。法とは佛隨自身なり又得道確信の人にとりては、自覺自證の菩提、心内經驗の涅槃道なり。されど一般の人よりして之を見れば、法は自ら自己以外の目標にして、佛隨の遺誡教法とならざるを得ず。在世の佛隨が菩提の現化なりし如く、その滅後にはその教法が菩提の代表となるは、自覺自證の道行きとして已むを得ざるの徑行なり。此を以て佛隨は、一度は阿難に告げて、

我以此法自身作證成最正覺、謂四念處、四意斷……八聖道。

といひ、法を修行道の方面より示せしも、又他處に之を言説の上より見て、

阿難隨よ、汝等の中にかく思ふ者あらん、師の言説
 是過ぎ逝き、我等の師は在らずと。されど阿難隨
 よ、此く見るべきにあらず、我は法と律とを説き又
 知らしめたり。此れ我の後に汝等の師なり。

當自檢心、阿難、汝謂佛滅
 度後無復覆護、失所持耶、
 勿造斯觀、我成佛來所説
 經戒、即是汝護、是汝所持。

即ち佛隨は諸法の主にして、法は聖者の説きし所なるが故に歸依すべし。中阿の正法律の八未曾有を説きしも、皆佛隨の説法と戒律との感化力を説きしな

- (1) M. N. Anupada (選 Vol. III. p. 115.)
Sāriputtam eva taṃ sammāvadamaṇo vedayya :
Bhagavato putto oraso makhato jāto, dhammajo, dhammanim-
mito,
dhammadāyādo, no āmisadāyādo' ti.
Sāriputto, bhikkhave, Tatthāgatena anuttaraṃ
dhammacakkaṃ pavattitaṃ sammadeva anupparatteti' ti.
- (2) 中阿請々經
參照 S. Nip. Sela v. 10 (p. 105.)
Itivuttaka 100 (p. 101.)
S. N. VIII. 7. (Vol. I. p. 191.)
同本 雜阿十八 (辰三 5b-6a), 別雜十二 (辰五 76.)
雜阿二十三 (辰三 38a), 同二十五 (辰三 46a), 同四十 (辰四 40b),
同四十五 (辰四 63.)
別雜六 (辰五 11b.)
勝鬘經 (增十二 59a.)
- (3) 尺三 52a.
- (4) M. N. Aggivacchagotta (Vol. I. p. 482.)
byākaramāno vuttavādi e' eva me..... dhammassa cinnu-
dhanmaṃ byākareyya,
- (5) D. N. Mahāparinibbāna (p. 33, R. D. IV. 8-11.)
- (6) pada,
- (7) vyañjana.
- (8) 尺九 15, 16a.

り。かゝれば説法戒制の保存傳承は自ら滅後の重要事とならざるを得ず。説法の繼續或は遺囑の事が諸處に存するは此が爲なり。

① 正語する者は舍利弗を稱していふべし(かれは世尊の眞の子、口より生まれ、法に生まれ、法に育てられたる子)法の繼承者にして、慈の繼承者にあらずと。比丘よ、舍利弗は如來が轉じたる最上の法輪をその儘に轉ず。

この文にて所謂る法の相續者といふは、自ら傳承教理の相續者たらざるを得ず。故に他傳には之を轉輪王子の相繼に比し、增阿四十八^②に、佛隨は阿難に遺囑して、我今は無上法王、我今遺無上善法、殷勤囑累汝……我前後所説法、盡囑累汝といへり。此の如く傳承遺法を尊重する中にも、佛滅を距る事遠からざる者には、未だ明に文字典籍の傳承或は誦讀受持を云はず。例せばM. N. 婆蹉經^③には、語り傳へん者は、我が法に従てその儘を語り傳へよ、といへり。涅槃經^④には四大教法を説きて、如來所説の法と戒との傳承保存には注意せる跡明かなるも、その句^⑤及音^⑥を誦すべきを云て、未だ必しも一定の典籍とは云はず。その同本なる遊行經^⑦には經の字あるも、それは必しも典籍の義には

汝等輩、
是我眞子、從口而生、法、法
所化、汝當教化轉相教誨。
……舍利子、我所轉法輪
汝亦能轉。

- (1) 先に掲げし Mahāparinibbāna (R. D. IV. 8-11.)
遊行經 (辰九 15, 16a) の文。
- (2) 佛般泥洹經 (辰十 15a.)
般泥洹經 (辰十 4a.)
- (3) 先に掲げし Mahāparinibbāna (R. D. IV. 1.)
遊行經 (辰九 21b.) の文。
- (4) 辰十 19a.
- (5) 辰二 73ab.
- (6) 辰三 54a.
- (7) 辰九 60a.
十二部經の名稱は諸處に存す
中阿 善法經 (辰五 4a.)
心經 (辰七 20a.)
增阿 十八 (辰一 72b), 二十一 (辰二 2b),
三十三 (辰二 61a), 四十六 (辰三 39a.)
雜阿 四十一 (辰四 38a.)
別雜 六 (辰五 38b.)
- (8) 辰九 14a 第十二行より 14b 三行迄の間、

あらず。所謂る第一結集の真相は十分確定し難きも、恐くは布薩と共に説法偈文の合誦を行ひし者なるべし。此の如き傳承は、次一定の口傳となりて、編輯と同一の結果にて漸々一定の順序形式を得しならん。特に毘舍利的論争は傳承の一定に刺激を興へしは明かなり。涅槃經⁽¹⁾には、法と律との傳承正否に關する注意は既に綿密なるも、一定したる編輯の跡は明かならざるに、他本⁽²⁾にてはこの點特に明白となり、經戒の増減を許さず、結經に存すると否とによりて正否を判ち、其佛經と不乘經とを分別するを命じ、パー傳及遊行經⁽³⁾には法と律とを待むて佛在世の如くせよとの教訓なりし者は、佛般泥洹經⁽⁴⁾に至りては經文を誦讀する事を無爲の道、又求壽生天の功德ありとして

吾泥洹後轉相承誦經奉戒……尋後思念吾世有佛有妙經典

との教令に化せり。此と同じく雜阿十三⁽⁵⁾には世尊の法は經に歸着すといひ、增阿四十八⁽⁶⁾には、十二部經を誦しその義を解し、その教に違はざらんを以て、涅槃に至るの道となし、長阿清淨經⁽⁷⁾には法燃燄を解釋して、十二部經を善く受持稱量廣演分布するにありとせる等、皆結集傳承の思想を代表す。此の如き傾向は概していへば漢譯經典に多し。例せば遊行經に佛が法を證したりといへる分⁽⁸⁾は、パー傳に存せずして、その中には十二部經を以て法となせり。此等は漢譯傳のパー傳

と趣を異にせる點なりと雖も、バリ傳にも、已に九部經の名目を以て傳承結經を尊重する傾向十分に明かなり。即ち先に⁽¹⁾正法開取の例として掲げしA. N. 五品の正法經はこれに次ぎて典籍傳承を重んじ、その百五十五經⁽²⁾は同六品五十一經⁽³⁾と同じく九部經第一の目を掲げて之を正法第一の基礎と稱し、⁽⁴⁾五品百五十四經⁽⁵⁾は同じく九部經第一法を通過學習⁽⁶⁾するを命じ、百五十六及七經は法律⁽⁷⁾即ち經と律と本母⁽⁸⁾(即ち論)を固持し誦讀して、之が文句に通ずるの要を教へて、多聞⁽⁹⁾と傳承⁽¹⁰⁾とを獎勵せり。是れ皆正法といふ思想が固定的經典に向へるを示せり。後に示さん如く、過去佛の法は滅せしも、我が法は永く存すといふが如きも、この意義にての法に外ならず。法は説法結集即ち經典の傳承となり、此の如くにして師主に代はりて佛徒の歸依となれり。

佛教の經文尊重は一の特徴として後世まで存したり。而してその端緒は、佛隨の人格的感化とその現實的崇拜が薄らぎ行くに従て、之が代償をその遺法に求め、法歸依を眼前の傳承經文に求めしなり。傳承の尊重は自ら相承教權の尊重となり、又從て教團内の教權統一を必要とするに至れり。今茲に經典尊重に作へる一現象としてこの事を觀察せん。

教團即ち僧伽⁽¹¹⁾は和合團體にして、その和合道行は法と共に佛教の重要事なり。

- (1) 上 p. 172—173
- (2) Vol. III. p. 177.
- (3) Vol. III. p. 361.
- (4) Navaṅga とは sutta (經) geyya (祇夜), veyyakaraṇa (受記), gāthā (偈他), udāna (優陀那) itivuttaka (本事), jātika (生經), abbhutadhamma (未曾有法), vedalla (方廣)
大集法門經 (庚十 65a.) に此目あり
- (5) ayaṃ paṭhamo dhammo saddhammassa tṭhitiyā asamamosāya anantaraddhānāya samvattati.
- (6) Vol. III. p. 176.
- (7) pariyāpanāti.
- (8) mātikā.
- (9) bahusutta,
- (10) ūgatīgama.
- (11) saṅgha.

- (1) D. N. Mahāparinibbāna (p. 3-6 R. D. I. 5-11.)
 同本 長阿 (灰九 10.)
 參照 中阿 雨勢經 (灰六 72f.)
 增阿 三十四 (灰- 68b, 69a.)
- (2) M. N. Gopakamoggallāna (暹 Vol. III. p. 85f.)
 同本 中阿 瞿默目捷連經 (灰六 76f.)
 p. 88. 此 appaṭisaraṇā mayam dhammasaraṇā.
 77a. 我等不依於人而依於法。
- (3) 同上 p. 91. tathārūpassa dhammā bahussutā honti, dhatā cesā
 paricitaṃ manasāvpekkhitā diṭṭhiyā suppaṭividdhā.
 同上 77ab. 如是諸法廣學多聞守持不忘積聚博聞……至千意
 所推觀明見深遠……久所曾習久所曾聞恒憶不忘
- (4) D. N. Mahāparinibbāna (p. 60. R. D. VI. 2-3.)
 遊行經 (灰九 21b.)
- (5) M. N. Kosambiya (Vol. I. p. 321-322.)
- (6) Saṅgha, avivada, saṅgī.
- (7) 長阿 遊行經 (灰九 14a.) パーリ傳此の分を缺く
 長阿 清淨經 (灰九 60b.)
 M. N. Cūḷagosiṅga (Vol. I. p. 20b.)
 同本 中阿 牛角婆林經 (灰七 37a.)
- (8) 灰六 42b.
 參照 中阿 長壽王經 (灰五 98a.)

而して佛在世の時には、教團の和合は同一理想を抱き同一道行を修する團體として、その團衆の一致を守り、その中心に師主佛隨を戴きたり。此故に教團には未だ傳承なく、從て傳承教權なく、團衆平等の理想を實行したり。涅槃經⁽¹⁾に、阿闍世王の大臣雨勢が跋耆討伐の事を問ひしに答へて、佛は彼等の和合七事を説くと共に、教團四衆の和合を勧め、同じく七事を説示せり。而してその七事は皆和合道行の事にして、その中には未だ教權の觀念を有せず。然るに滅後未だ久しからざる時に、同じく大臣雨勢が阿難に同事を問ひし時には⁽²⁾阿難は第一に、全く師主に代はり、佛隨と同位にて教團和合の中心となる比丘なきを答へ、佛徒は今や人に依らずして法に依り、相集まりて法を誦する事を誦れり。雨勢が進て、その教團和合の結合力を問ふや、阿難は之に答へて、滅後、教團の首領たる比丘は十事の徳を具へざるべからずとて、その中に廣聞記憶等⁽³⁾を數ふ。この經は、その他の點に於ても極めてよく當時の實狀を傳へ、この點にても佛徒が漸次教法の傳承博聞を貴ぶに傾きし状態を明かにせり。その他佛隨が入滅前に⁽⁴⁾弟子に教へて、少小戒律を棄て、大節によりて和合し、長老に敬順なるの必要を説きし、或は M. N. ⁽⁵⁾に佛が弟子の争ひを裁して和合、無諍、一致⁽⁶⁾の必要を説きし、或は諸經⁽⁷⁾に存する共同歡喜同一乳味、同一和合の訓誡、又は中阿 瞻波經⁽⁸⁾の清淨和合の偈の如き、皆尙精神的團結と共

- (1) M. N. Sāmagāma (Vol. II, p. 247.)
同本 中阿周那經 (伏七 57.)
- (2) dhammā piyakaraṇā
- (3) adhikaraṇasamathā
- (4) Āyasman
- (5) Tiṇavattikara
- (6) sārāṇiya

に同一教法を奉じて、その間に異論を挟まざるを必要とせり。

此より進て經文が一定の結集を得字句の相違を論ずるに及びては、又特に毘舍利の爭論以後は、教團の傳承が一定の教權となり、その長老が單に道行の長老たらずして、教權の把持者となるは避け難き勢なり。只此の如き教權の發達に關する材料十分ならざるを以て、二三この傾向を有する材料を掲ぐるに止めん。中阿周那經⁽¹⁾には清淨經と同じく、尼提師の入滅後、其の弟子の分裂相乖諍するを見て、周那は佛教にも此の如き事なからしめんとて、佛にその旨を白し、佛は同一水乳同一和合の事を訓ふ。その大體は寛容なる和合の精神を失はず、そが分諍を妨ぐの六慰法⁽²⁾といへるは教團の親愛和樂を増進すべき平等和合の心得に外ならず。されど、その七止諍法⁽³⁾として列擧する所は、教團の長老⁽⁴⁾に弟子の諍議を裁斷し調停せしむるの法なるのみならず、已に分立したる教團の分派ある場合には、その教派の長老上尊若くは宗主⁽⁵⁾をして争を裁し、又比丘の懺悔を聞きて裁可を與へしむべきを規定せり。此の如きは分派或は孤立教團の長老上座が漸次その配下に對する教權者となりし時勢を示し、長老が宗主として正統の教權を握るに至りしを見るべし。この周那經は清淨經と同じく、分裂即ち相承⁽⁶⁾の相違を防ぐを目的とせる記事にして、二者共に正統相承の觀念を表はせり。中にも周那經に至りて

(1) Thera (梵 Sthāvira)

A. N. IV. 22. (Vol. II. p. 23.)

Pahīmajātīmarāṇo brahmacariyassa kevalī,
tam ahaṃ vadāmi therō' ti yassa no santi āsavā,
āsavānaṃ khayā bhikkhu therō' ti pavuccati.

(2) 辰四 1a. (パーリ同本之全缺)

(3) パーリ傳にて Vaṅgīsa は常に Thera と稱せらる。

(4) 例せば馬鳴の 大莊嚴經論の始めに

薩婆室婆衆 是等諸論師 我等皆敬順

(5) 佛教聖典史論 (p. 23-24.)

はかれになき教權の宗主を有せり。此にても二經成立の間に時勢が速に此く變化しつゝありしを知るべし。此と共に漢譯阿含には長老を稱して上座といへるもの數處に過ぎず、然るにパーリ傳には上座の名稱甚多し。是れパーリ傳が上座正統の勢力多かりし方面の傳承なるを示しはせずや。

兎に角上座が教權把持者たるに至りしは、正法傳承と教團統一との必要より來りし者にして、毘舍利會議の頃より阿育王に至る恐くは數十年或は百年の間に、この傾向は大に發達し確立せしなり。此故に雜阿三十六にて諸上座列座の前に、尊者の婆耆舍は佛德を讚歎すると同時に、上座を讚して、

上座諸比丘 …… 出一切見處 清淨無瑕穢 是故稽首禮

といへり。後世の諸阿毘達磨及毘婆娑の編者が、その首に佛隨と共に上座に歸敬を表する風は已に此に存し、上座の教權が教法と共に歸依の目標となりしを示せり。此の如き教權の發達と共に、分諍異議を惡むの情強くなりしは、又自然の勢にして、清淨經と周那經とは、この傾向を代表する上座的文書の範なり。されど、全體より云へば、佛教に於ける教權の發達は、基督教の初期三四百年の間に於ける如く明確に又鞏固にはならざりき。茲には經文尊重に關聯して之を記す。

- (1) Cattāro thūpārahā.
D. N. Mahāparinibbāna (p. 52. R. D. V. 20-23.)
同本 長阿 遊行經 (灰九 17a.)
增阿 十九 (灰- 78b). 同 四十九 (灰三 56b.)
同 五十 (灰三 62b.)
- (2) 灰- 53b.
- (3) Sarira (梵 Śarira).
- (4) 灰二 2a.
- (5) 灰二 54a.
- (6) 增阿 十四 (灰- 58a.) 同 三十五 (灰二 37a.)
S. N. I. 5. 7. (Vol. I. p. 33.)
同本 雜阿三十六 (灰四 2b). 別雜八 (灰五 48a.)
Ārāmaropā vanaropā, 種植園苑林
ye janā setukārakā, 洪流設橋船
papañ ca udapānañ ca 曠野造好井
ye dadanti npassayañ 要路造客舍 云々
この偽文に列擧したる功德は阿育王柱面銘文第七に行ひしといへる事業と殆ど同一なり。
阿育王銘文 (Senart, Les Inscriptions de Piyadasi, Vol. II. p. 82.)
magesa pi me nigolhāni lopāpitāni chāyopagāni hoṣaṃti
pasumunisānaṃ ambāvādikā lopāpitā aḍḍhakosikāni pi me
udapānāni khaṇḍāpāpitāni - nimsi dhayā ca kālāpitā āpānāni
me bahukāni tata tata kālāpitāni paṭibhogiyo pasumunisānaṃ.
- (7) 長阿 遊行經 (灰九 12b.)
起塔立精舍
- (8) 雜阿二十三 及二十五 (灰三 31f 及 45f.)
參照 阿育王經 (灰十 32.)
- (9) Mahāparinibbāna (p. 47. R. D. IV. 52.)
同本 長阿 遊行經 (灰九 10b.)
- (10) Cunningham, The Bhilsa Thopes.

遺跡と共に遺骨遺物の爲にも同様の塔婆を建築して之を巡拜したりしかば、如何なる人は此の如き造塔の尊敬を受くるに足るやの規定出て、佛陀はその首に居り、その他漏盡の人、高德の人、聖王は之に値すとの所謂る四種人應得起塔の規定をも生じたり。されば長老上座の遺骨は佛陀のと相并て塔婆の中に祀られたり。サッチにて發見したる舍利弗、目犍連、末田地の遺骨の如き是れなり。

元來塔婆崇拜は、入滅したる佛陀の人格的感化の代償として起りしなるべきも、多く民間に行はれては修福生天の方と見らるゝに至れり。增阿十三に佛陀がその前生に會て地主大王たりし時の善事功德を列擧して、舍利即ち遺骨の爲に神寺を建て、形象舍利を供養し、盛に神事を營みし事を以て福徳因縁となせり。同じく增阿二十一に四梵福を稱して、和合聖衆と轉法輪聞法とに并べて、起偷婆、補治故寺の二を擧げ、同二十八に五王が神寺を建てし功德を説ける等、此種の信仰明かなり。涅槃經には造林植樹等の功德に加へて起塔立精舍を稱讃せり。その他雜阿に存する阿育王八萬四千塔建立の傳は、その事實の如何に係らず、當時の流行を見るべし。

その他、遺物及佛像に關しては、涅槃經に佛の入滅に先て佛の衣が金色を放ちしといへるは、遺物崇拜の端緒として見るべし。此の如く遺跡遺物等の爲に塔寺

- (1) Bhaja
- (2) Ajanta
- (3) 及二 17a.
- (4) 及二 44a.
- (5) Barhut
- (6) Sanchi
- (7) 雜阿二十三 (辰三 37b.), 阿育王傳 (藏十 26), 35—36.)

參照。過去佛の菩提樹 (Sanchi 東門横木裏面, Ellūra なる Tin Thal 窟第三層室右方壁等に彫刻あり)。

D. N. Mahāpadāna (暹 Vol. II. p. 4—5.)

同本 長阿 大本經 (辰九 2b.)

增阿 四十五 (辰三 63a.)

Vipassī	毗婆尸佛	Pātali	波羅利樹
Sikhi	尸棄佛	Paṇḍarika	分陀利樹
Vessabhū	毗舍婆佛	Sāla	娑羅樹 (Shorea robusta).
Kakusandha	拘樓孫佛	Sirisa	尸利沙樹 (Acacia sirisa).
Konāgamana	拘那含佛	Udumbara	優曇婆羅樹 (Ficus glomerata).
Kassapa	迦葉佛	Nigrodha	尼拘律樹 (Ficus indica).

建築の盛なると共に始めはその裝飾として人物等を刻せしが終に佛像を刻して佛像崇拜を生じたり。今日現存の實物について見れば、阿育王時代及其の後二三百年の塔寺には、佛陀の代表として法輪、神樹等あれども未だ佛像なし。佛像の最古なるは、蓋しバジャの窟に柱面に極めて微かに残れる畫像なるも、その年代を確定し難く、且つ此の畫も、アジャンタの最古の柱畫も皆寧ろ裝飾として存し、中央には塔婆を据えて本尊とせり。佛像の崇拜は蓋し西北印度の希臘彫刻に始まりし者の如し。されど典籍にはその跡存し、増阿二十四には佛像が人をして歡喜を發せしむるを説き、同二十八には五王が牛頭栴檀にて佛像を作りし記事あり。又その功德は生天不可量なりといへるを見れば、その崇拜が修福に出でしを示せり。遺物と事件との紀念崇拜を兼ねたるは菩提樹の崇拜にして、この樹の崇拜は佛成道に關する記事には存せざるも、その起原は古く、少くとも阿育以前に存して、ベルプトの彫刻に現はれ、サッチのには著しくなれり。典籍にては阿育傳の等に明かなり。この崇拜が他の植物崇拜と如何の關係あるやは今此に研究せず。

第三。遺物遺跡の崇拜は死物を對象とし、經文も亦直に活ける人心に十分の満足を與へ難し。此に於て、佛陀の再現若くは新佛の出現を希求し信仰するに至れ

- (1) Mahāparinibbāna に存せず。その VI. 41 と 42 との間に相當して遊行經 (灰九 21a.) に存す。
 參照 摩訶僧祇律三十二 (列十 32b.)
- (2) 三十三 以下 (盈六 60f.)
- (3) 增阿三 (灰一 12b, 13a), 同四 (灰一 16b.)
- (4) D. N. Āṭānāṭiya (暹 Vol. III, p. 201—211.)
 D. N. Mahāpācāṇa (暹 Vol. II, 1. f.)
 同本 長阿 大本經 (灰九 2f.)
 S. N. XII. 4. (Vol. II, p. 5—9.)
 S. N. VI. 2. 4. (Vol. I, p. 155—157.)
 雜阿 十五 (灰二 82b.)
 同 三十四 (灰三 99b.)
 別雜 十六 (灰五 107b.)
 增阿 四十四 及 四十五 (灰三 32f.)
- (5) A. N. IV. 21. (Vol. II, p. 21.)
 增阿二十三 (灰二 14b.)
 S. N. VI. 1. 2. (Vol. I, p. 140.)
 同本 雜阿 四十四 (灰四 55b.) 別雜 五 (灰五 34.)
 (下 p. 149—150 抄出)
 M. N. Kandaraka (Vol. I, p. 399.)
 ye pi te abesuṃ atitaṃ addhānaṃ arahanto sammāsambuddhā
 te pi bhagavanto etarapamaṃ yeva sammā bhikkhusaṅghaṃ
 paṭipadesuṃ, soyyathāpi etarahi mayā sammā bhikkhusaṅgho
 paṭipādito; ye pi te bhavissanti anāgataṃ addhānaṃ
bhikkhusaṅghaṃ paṭipādessanti, soyyathāpi... ..

り。蓋しこの信仰は佛日の沈淪したる後にも、その再現を希求し、太陽世間眼は死と共に滅せずと信ぜしに出て、入滅時の話説にも已にその萌芽を示せり。涅槃經⁽¹⁾に大迦葉が佛入滅の時その床邊に侍せざりしが、後波婆國より歸り來りて、佛身が既に棺槨の中にあるを嘆じて、再び佛身を見んと求めしに、佛はその兩足を棺中より出だして出現せりといふ。大乘の涅槃經⁽²⁾にこの時佛隨が金色身を現はして説法せしといふは、この傳説の布演と見るべし。此は入滅後間もなき時の再現として傳へらるゝのみにて、その後佛隨が再現すべしとの信仰ありとは見えず。佛敎にては、先に示せし如く、漏盡の人は再び生を受けざるが故に、佛隨自身が再三出現すべしとは信じ難く、從て基督敎に於ける如き再現の信仰生ぜず。さればとて、後世の三身の如く、常住の佛隨が方便示現するとの觀念も未だ熟せず。而も佛隨の人格的出現を希求するの情は止まず。此に於て釋迦佛の再現よりは、寧ろ新佛の未來出現を希望するに至れり。增阿⁽³⁾には一人出世を説きて、佛出現の時に一切人民幸福を得べしといへるは、一定の釋迦佛の出現のみに限らず、一般に佛隨の出現を説きたる者、即ち三世諸佛の信仰を表せり。又佛の説法には多く過去佛を説けるのを見れば、その信仰が又將來佛の信仰と伴ふは、自然の勢にして茲に三世諸佛出現の信仰となれり。⁽⁴⁾

- (1) Hunter, India
 (2) Rhys Davids, *Buddhist Suttas* (Introduction p. 18-19.)
 (3) Cakram cakramāna. 此事後に論ず。
 (4) 法輪又梵輪といふ (上 p. 46-47.)
 順正理論六十七 (冬六 27b.) 之を解釋して曰く
 名爲梵輪, 是真梵王力所轉故, 佛與無上梵德相應, 是故世尊獨應
 名梵, 山契經說佛亦名梵, 亦名寂靜, ……佛具此德故立梵名, 既
 自覺悟爲令他覺, 轉此授彼故名梵輪, 即梵輪中唯依見道, 世尊有
 處說名法輪。
 同本 顯宗論 三十三 (冬八 54.)
 參照 雜阿毘曇心論 十 (冬十二 91b.)
 大毘婆娑論 百八十二 (收八 24a.)
 法輪は獨り佛教のみならず, 耆那教亦之を崇拜し, 二者共に古俗
 を襲用せしなり。Bühler, *Epigraphica Indica* (Vol. II. p. 321-322.)
 之を證す。參照 Dahmann, *Mahābhārata* p. 215.
 (5) Manvantara.
 (6) D. N. Ambattha 5. (Vol. I. p. 88.)
 同本 長阿 阿摩塞經 (庚九 67a.)
 長阿 種德經 (庚九 77b.)
 長阿 究羅檀頭經 (庚九 79b.)
 中阿 三十二相經 (庚五 63.)
 增阿 十三 (庚一 52b.)
 (7) 本行集經 相師看占品 (庚七 32f.)
 (8) M. N. Brahmāyu (Vol. II. p. 134.)
 同本 中阿 梵摩經 (庚七 1.)
 中阿 大天捺林經 (庚五 78f.)
 A. N. IV. 245. (Vol. II. p. 245.)
 A. N. V. 31-33 (Vol. III. p. 147-151.)
 增阿 八 (庚一 30b.) 同八 (庚一 31.)
 同 十二 (庚一 50b.) 同 三十二 (庚二 61ab.)
 同 三十六 (庚三 4a.) 同 四十八 (庚三 49f.)
 雜阿 二十七 (庚三 58.)

此等の信仰が何れの時代に如何にして生じたるやは十分確定し難きも、その發達につれて三世諸佛の信仰出て、諸佛の出現と轉輪聖王とは相伴ふとの信仰となり、又將來の佛隨は慈氏と稱し、一轉輪王と同時出現すとの信仰を生じたり。ハンター及リス・デギツ⁽¹⁾は轉輪王の語説は、阿育が海内を統一して佛教を保護せしより生じたりとなせども、阿育は佛陀と同時にあらざれば、此より佛と轉輪王と同時出現の説話を生ずとは見難し。且つ轉輪王の七寶は、阿育王に關係なくしてギンヌ神の説話に近く、ギンヌがその輪を轉じて⁽²⁾三界の主となるとの神話が轉輪王に轉せしと見るを至當とすべし⁽³⁾。又聖人⁽⁴⁾が反復出現して世に治平を致すとは叙事詩の信仰にして、此は蓋し將來佛出現の信仰を助け、又ギンヌ化現の説話ともなりしなり。そは兎に角、佛教にて轉輪王と佛陀との關係は甚だ密着にして、王が七寶を有する如く、佛は七覺分を成就し、二者共に四未曾有法を有し、三十二相を具ふるのみならず、此の如き人は家に在れば轉輪王となり、家を出づれば佛陀となるといふ⁽⁵⁾。釋迦傳にもこの説話入り來り、その誕生の時、相師は同様の豫言をなせり⁽⁶⁾。さればこの二者は説話發生の始めより不離の關係を有し、二者同時出現若くは同一人と信ぜられしなり⁽⁷⁾。

二者此の如く關係し、而して將來佛の出現が佛教の要求的信仰となりしかば、二

- (1) *Çaṅka* (*Mahābhārata*, *Saptikaparvan* v. 745, 869. &c.)
- (2) *Maitreya*, *Metteya*.
- (3) 中阿 説本經 (灰五 76f.)
D. N. Cakkavatti (暹 Vol. III. p. 63f.)
同本 長阿 轉輪聖王修行經 (灰九 33f.)
- (4) 增阿 四十四 (灰三 33f.)
- (5) 增阿 四十九 (灰三 58f.)
- (6) 長阿 轉輪王經 (灰九 97.)
- (7) 增阿 十一 (灰一 44b), 同三十七 (灰三 6b.)
- (8) 增阿 十九 (灰一 80b), 同三十一 (灰二 52a.)
同三十二 (灰二 57a), 同三十八 (灰三 91a.)
- (9) 同三十五 (灰二 75b), 同四十四 (灰三 34b.)
- (10) *Mahāsudassana Jākaka* (*Rhys Davids, Buddhist Suttas*, p. 241.)
同本 長阿 遊行經 (灰九 18-19.)
中阿 大善見王經 (灰五 81f.)
本行集經 受決定記品 (灰七 14.)
- (11) 中阿 四洲經 (灰五 64f.)
頂生王故事經 (灰八 10.)
- (12) *Kūṭajīta*.

者が將來何れの時何れの名を以て現はるゝやといふ問題を生じ來らざるべからず。而してこの問題は又ギシヌ神話の材料を以て解釋せられぬ。即ちギシヌがその右手に携へて天下を制御すといふなる螺即ち瓊伽⁽¹⁾はその王の名となり、又ギシヌと一體なる太陽神ミトラの名は將來佛に轉して慈氏即ち彌勒⁽²⁾となりぬ。而してその出現の時代につきては或は人壽八萬歳の時この二者の出現ありといひ⁽³⁾或は將來久遠の時にありといひ⁽⁴⁾又その國は鷄頭國にありといふ。其の他人壽八萬歳の時瓊伽王の出現ありといふ者⁽⁵⁾彌勒佛はこの後三十劫にして出現すといふ者⁽⁶⁾或は時を定めずしてその出現を説きし者⁽⁷⁾皆この説話が漸次事實として希望せられし路にして、特に增阿⁽⁸⁾に佛隨が迦葉に命じて、鷄頭山中に入りて彌勒の出現を待つべしといひしといふ説話の如きは、豫期希望の切なる者あるを見るべし。

この外、轉輪王が佛隨の前生なりとの信仰は將來佛には直接の關係なけれど、二者の關係を示すに足る者あり。大善見王が佛隨の前生なりしとの説話⁽⁹⁾及び轉輪王頂生が佛の前生なりといふが⁽¹⁰⁾如きは是れなり。この頂生⁽¹¹⁾とはギシヌの一屬性なれば、その説話がギシヌ神話より出てしを知る。

此の如く、將來佛出現の希望は希求豫期となり、終に瓊伽聖王の時に彌勒佛の出

(1) 增阿 四十四 (伏三 33^{1/2})

現あるべしと信じて、その一生につきて詳しき豫言を生じ、⁽¹⁾その豫期は確實なる者と信ぜられぬ。この信仰は一片の説話に過ぎざるの觀ありと雖も、此によりて佛の人格を神話的にして、一度現世出現の歴史的佛隨を理想化し、その出現を三世永遠に望ましむるに至れり。而して此の如き信仰は、又佛隨の常住法身を意識せしむるの一刺激若くは材料となれり。

第六章 佛陀人格の譬喩的叙説と
佛傳の神話化

第六章 佛隨人格の譬喩的叙説と

佛傳の神話化。

佛徒は如何にして佛隨の人格を人間以上の神人と化したるか。

佛隨の人格は轉輪王と結合して神話に近づき、三世諸佛の觀念は歴史現實の佛隨を説話的にし、又普遍にしたり。而してこの神話化の跡を見るに、佛隨が始めより神話的人物なりしにあらざして、始めは單にその人格の譬喩的叙説なりし者が、後には神話的屬性として固着するに至りしを見る。是れその譬喩が大抵一般に知られたる古神話の材料に出でし爲なり。かくて佛傳と古神話と聯絡して多くの譬喩或は讃嘆の偈文を生じ、且つ佛隨の再現或は前生に關する説話は益々佛隨の歴史的人格を現實より遊離せしめて神話的となし、佛教の哲學思想がウパニシヤドに基く如く、その神話は古傳と説話とに基きて組織せられたり。その神話化が如何の程度に達したるやは、本行集經等に現はれ、且つセナル等の研究あれば此に論ぜず、今はその始原と材料とにつきて少しく考究せん。

佛徳の譬喩的讃歎の第一に記すべきは水中蓮華の喩にして、先に記したる如く、佛隨が現世の煩惱、人界の繫縛に染まざるを、水中の蓮が泥より出て、泥に染まざるに比せり。この言は古きウパニシドに存し、後には三十二相の中第十一の大人肌皮座水不著として用ひらる。されどこの説話はそれ以上に神話化の材料とはならざりき。

次に觀察すべきは醫王の譬喩にして、第一は衆生煩惱の毒箭を抜く醫王、第二は衆生無明の眼を開き一切の病を醫する無上醫なり。前者は拔箭の喩と稱して、バ、リ文にはなき婆耆舍經に存し、後者は諸處に存す。增阿四十六旋羅經に曰く、
如健者得伸、盲者得眼、目冥者得見明、沙門瞿曇亦復如是……與我等說法。

と。この言は明かにエタにてアシキンをして天醫として、盲者を明かす神とせるに出で、佛陀の感化をアシキンの人世を恵む力にて表はしたる者なり。此も多くは譬喩として存し、佛を直に神話化する事は後の藥師如來にのみ表はれたり。金光明經の金鼓の如きも蓋しアシキンの金色旗鼓より出てし者なるべし。

佛陀が天醫としてアシキンに近きが如く、又衆生長夜の暗を破する上にては光明神たるアシキンに似たるが故に、その光明の十分に現はれたる太陽が、佛陀の人格を説くに適するは云ふまでもなし。この點は已に處々に叙説したれども、尙少

- (1) 第二章 p. 42-43.
- (2) Chāndogya-up. IV. 14. 3.
Yathā puṣkarapāliṣa āpo na kliṣyanta, evam-evam-vidi pāpaṃ karma na kliṣyata iti.
尙 金光明最勝王經 第五卷 蓮華喩讚品 (黃九 16b.)
金光明經 讚嘆品 (黃九 47b.)
- (3) Anuttaro sallakatto.
Itivuttaka 100 (p. 101.)
S. Nip. Sela. v. 13 (p. 101.)
- (4) 雜阿十五 (辰四 65ab), 別雜 十三 (辰五 82b.)
Divya-avadāna XXVII. (p. 365.)
同本 雜阿 二十三 阿育王傳 (辰三 31b.)
nimnā connamate natāvana-
mate Buddha-anubhāvān mahi.
stlāṇuḥ ṣarkara-kaṅṭaka-
vyapagatā nirdoṣatāṃ yāti ca
andhā mūkaḥcendriyāḥ-ca
puruṣā vyaktendriyās-tat kṣaṇaṃ
saṃvādy-anty-anighaṭṭitāḥ-ca
nagare nandanti tūryasvanāḥ.
(最後二句二者互に顛倒.)
- (5) 及三 43a; 參照 同 及三 36b.
- (6) R̥gveda-saṃhitā, に天醫 daivya bhiṣajā (I. 34. 6., 116. 16., 157. 6., VIII. 9., 18. 8., 22. 10., X. 39. 3., 39. 5.)
盲者を明かし云々は X. 39. 3. に
andhasya cin nāsatyā kṛṣasya cid,
yuvām-idāhur-bhiṣajā rutasya cit.
- (7) Bhaiṣajya.

地下即成平
高地反爲下
山佛威神故
荆棘諸瓦礫
皆悉不復見
雙盲及瘖瘡
即得見聞語
城郭諸樂器
不擊妙音出

- (1) 辰四 65b, 參照 雜阿三十六 (辰四 1b, 2a.)
- (2) Mahāvastu (Vol. III, p. 426.)
この偈元 *Āṭapatha-brāhmaṇa* より出づ。パーリ文にては S. Nip. Sela v. 20—21 (p. 107.) に存す。今二者を對照す。

Agnihotrāmukhā yajñā,
Sāvitrī chandasāṃ mukhaṃ,
rājā mukhaṃ manuṣyāpāṃ,
nadināṃ sūgaro mukhaṃ,
naksatrāpāṃ caandro mukhaṃ,
ādityo tapasāṃ ūrdhvaṃ
tiryag-adhas-tapasvatāṃ ;
sadevakasya lokasya
sambuddho vadatāṃ varo.

Aggihuttāmukhā yaññā,
Sāvitti chandaso mukhaṃ,
rājā mukhaṃ manuṣṣānaṃ,
nadināṃ sūgaro mukhaṃ,
nakkhattānaṃ mukhaṃ caudo,
ādīcco tapatāṃ mukhaṃ.

- (3) 長阿 究羅檀頭經 (辰九 82a.)
雜阿 五 薩遮經 (辰二 39a.)
別雜 三 大祠經 (辰五 36a.)
中阿 梵摩經 (辰七 4b.)
增阿 九 (辰一 35b.) 同十八 (辰一 74b) 同廿五 (辰二 23a.)
同 廿六 (辰二 33b.) 同三十 (辰二 51b.) 同四十四 (辰三 18a.)
同 四十一 (辰三 23b.)
- (4) 諷誦又剛隨即ち Chandas.
詩又婆比室又は婆毘帝 即ち Sāvitti.
- (5) S. N. XXI. 11. (Vol. II, p. 281.)
S. N. III. 1. 4. (Vol. I, p. 17.)
同本 雜阿 四十九 (辰四 90b.)
- (6) S. N. VIII. 11. (Vol. I, p. 196.)
同本 雜阿 四十五 (辰四 62b.) 別雜十二 (辰五 75b.)
S. Nip. Sundarika, v. 12. (p. 82.)

參照
Divya-avadāna XXVII (p. 364.)
同本 雜阿 二十三 (辰三 31a.)
同本 阿育王經 (辰十 29a.)
Div.-av.
kanaka-acala-sannibha-agradeho
divirendra-pratimāḥ salilagāmi
paripūrṇa-ṣaṣṭhānka-saunmyavaktaro.

阿育王經
佛身如金山
行步如象王
面貌甚端嚴
猶若於滿月

しく之を説かん。雜阿四十五には佛が一切の癡を斷じて心盲を破る徳を稱して圓照神通眼光明顯四衆といひ、明日如佛者慈光照一切といへるが如きは譬喩の最も簡單なる者なり。それより進んで佛隨を直に光明日月と讃し、具象的に佛隨の身體を金色なりとせり。蓋しモタの神話にて英雄神キシメ、サキタル、アシキンが天上の光明にして又世間の勇者なるが如く、佛隨の智慧と光明とは常に相聯關せしなり。

の祭祀は火祀を首とし、サキトリは歌詞の首、の祭祀火爲上 諷誦の詩爲上

王は人間の首にして、海は諸流の首、(人中王爲上) 衆流海爲上

月は諸星宿の首、星中月爲上

日は輝く者、有生物を照らし下だす者の上首、光明日爲上

正覺者は天世界に宣示する者の優、天及世間人 唯佛爲最上

その他 S. N. に日月燈光と并べて佛陀が世間無上の光なるを述べ、又は月喩とて佛の光が夜暗を照らすを説き、しは、皆明かに譬喩なり。されど譬喩と屬性と構想と事實とは何れの國にても混じ易く、譬喩は多く事實と見らるゝ事あり。特に空想的なる印度人にはこの傾向多くして佛陀の徳を日月に比せし佛徒は、又佛陀が眞に金色身を有したるが如く考へ、譬喩は一轉して實事の如く、佛陀の人格は

- (1) 雜阿 (辰四 54), 別雜十二 (辰五 86a.) 增阿 (辰一 57b.)
- (2) 中阿 波羅牢經 (辰五 24r.)
中阿 教化病經 (辰五 36a.)
參照 S. N. IV. 2. 10. (Vol. I. p. 117.) 同本 別雜五. (辰五 30a.)
Pabbatassa suvanassa 佛身真金色
jātirūpassa kevalo..... 圓光遍一尋
- (3) 增阿 二十二 (辰二 86.)
參照 Lalita-vistara XIX. (p. 281.) 同本 大方廣莊嚴經 諸菩薩道場品 (雷四 38a.) 少異
nihsamṣayam varalakṣaṇo 過去三佛皆已現
litakaro utpanna jñānaprabho 智慧光明真金色
yema-idaṃ bhavanam virocati 於是遠暎無垢光
hi me svarṇaprabha-ālamkṛtāṃ 山是定有佛與世
na-asmiṃ candraraviprabhā 其光清淨踰日月
suvipulāsamdṛṣyate veçmani, 非益非燭星電等
no ca-agner-na maner-na vidyud- 亦非梵釋阿修羅
amalā no ca prabhā jyotiṣāṃ. 一切威光所能及
no vā Çakraprabhā na Brahmaṇa
prabhā no ca prabhā āsuri,
ekāntaṃ tamasākulaṃ mama
gṛhaṃ praḡduskṛtāṃ karmabhiḥ.
- (4) R. V. VII. 87. 5 にヴルナがスールヤを天上に据え附けしといふ條にスールヤを稱して金盤 hiranyā peṅkhā といへり。
- (5) 雜阿 四十八 (辰四 85a.) 別雜 (辰五 92b.)
- (6) Bṛhat-saṃhitā 69.
- (7) Lalita-vistara VII (p. 105.) 同本 大方廣莊嚴經 (雷四 15b.) に相師 Asita (阿斯陀) は明かに三十二大人相 (dvātriṃśatā mahā-puruṣalakṣaṇāni) の章陀論經中に (mantravedeṣu) 存するを説けり。
- (8) Mahābhārata, Çāntiparvan (XII) 343. 35-38
- (9) Tejasūbhyadhikau sūryāt-sarvalokavirocanāt, Çrivatsalakṣaṇau pūjyau, jaṭamaṇḍala-dhāriṇau jāla-pāda-bhujau tau tu..... pādavyoç-cakra-lakṣaṇau. (續く)
- (10) M. N. Brahmāyū (譯 Vol. II. p. 517-518.) 同本 中阿 梵摩經 (辰七 3.) 同本 梵摩論經 (辰八 62.) 下 p. 260-261 參照。

頗る神話的となれり。或は佛身が金山金樓の如く光明徹照せりとて、その千幅輪を讚歎し、⁽¹⁾或はその顔色巍々大山の如く、その三十二相は遠く四方を照らす⁽²⁾といへり。されど佛陀は未だ直に日神にはあらず、
⁽³⁾非日非不日 而放千種光 ……：圓光金光體の今日自歸命 尊今是日王といひ、或は雜阿⁽⁴⁾に佛を讚して之をギシヌに比せる等、譬喩の中にも佛徳と古神話との結合は明かなり。この結合は佛の三十二相に現はれて、神人的性質は佛陀の屬性として一般に承認せらる。ケルンによれば天文書⁽⁵⁾に三十二相に似たる記事ありとの事なれども、此等の叙説は古より神人、或は偉人の相として存したる者の如く、⁽⁶⁾大叙事詩⁽⁷⁾にナラダがナラ及ナラヤナ二仙に會して、その大人相を説ける者殆ど佛敎の三十二相に近し。蓋し此の如き大人相は民間の説話より、一方は叙事詩に編入せられ、他方は佛傳に附屬せしならん。今此と漢譯中阿に存する順序に數字を附したる者とを對照せん。

- ⁽¹⁾ 光輝にては一切世間を照す太陽よりも勝れ、
⁽²⁾ 吉祥尊ぶべき相を有し、螺髮を戴き、
⁽³⁾ 足にも手にも羅網を供へ、
⁽⁴⁾ 兩足には輪の相を有す、彼等二人は。
-
- (一) 身黄金色如紫摩金、
 - (二) 一孔一毛如紺青如螺右旋、
 - (三) 手足網綬猶如雁王、
 - (四) 足下生輪、輪有千幅、

- (1) vyūḥhoraskau,
- dirghabhujau,
- tathā muṣka-catuṣkinau,
- ṣaṣṭīdantāv-aṣṭadamṣṭrau.
- meghaugha-sadr̥ṣa-svanau,
- svāsyau, pṛthulalāṭau ca,
- subhrū, suhanu-nāsikau,
- ātapatreṇa sadr̥ṣo cīrasī devayos-tayos,
- evam-lakṣaṇa-saṃpannau mahāpuruṣa-saṃjñitan.

この類似は固より十分の一致にあらざれども、それが大人の相を叙する目的と趣とに於て相一致し、二者の關係密接なるを示せり。陰藏の事の如き、二者その相を異にすれども、それまでも大人相に數ふる事は、その關係の偶然ならざるを示す者にあらずや。此の如く、三十二の殆ど半數はこの中に存し、此に存せざる他の手足相の事もこの中に攝すべく、又他の項の他に存するあり。肌皮柔軟の事、廣長舌の事、毛孔青色の事は、敘事詩にも存して大自在天の屬性なり。青色相はギシメが自ら紺髪と稱せらるゝを説明する段の⁽¹⁾に存し、而して此は又エタ讚誦にて⁽²⁾太陽神

胸廣く、

腕長く、

かくて陰球四つあり、

六十の齒と八つの牙とあり。

雲と流れとの如き音聲にて、

顔貌よく額廣く、

陰美はしく、唇と鼻と美はしく、

蔽ひにては、二人の神の頂に似、

此の如く相を供へて偉人たるに適せり。

沙門釋曇成就三十二大人相。

(三十三) 兩肩上速通頸平滿、

(十六) 申手以摩其膝、

(十三) 陰藏猶良馬王、

(廿三) 四十齒(廿四) 牙平、齒不疎、齒白、

(廿六) 梵音可愛其聲猶如伽羅頻伽、

(十四) 身形圓好……上下圓相稱、

(廿九) 承淚處猶牛王(廿) 師子頰車、

(廿一) 頂有肉髻、鬘圓相稱、

- (1) Pāhūtajihva
- (2) Bṛhaspati
- (3) R. V. IV. 50. 1. mandrajihva
- (4) R. V. VII. 97. 5. sucikranda
- (5) Vāc.
- (6) Jihvā devī sarasvati.
金光明經に大辨才天 (即ち Vāc, Sarasvati) がその經を流布するといふは明に此に出づ。
- (7) 吠八 3a 等
- (8) R. V. VII. 68. 1. çubhru
,, VIII. 8. 2. hiraṇyapaças
,, VIII. 184. 2. puçkarasraja
- (9) Sūrya
- (10) M. B. Anuçāsana-parvan (XIII) v. 599.
hiraṇyākṣa
- (11) cicakramāna
- (12) uṇhisasiṣa (梵 uṣṇiça-çirça)
- (13) çrivatsa karṣṭabha.
- (14) anuvyañjana.
- (15) R. V. X. 177. 2. patuṅga
- (16) ,, V. 45. 9., VII. 63. 5. çyena

サギタルの屬性なり。廣長舌⁽⁹⁾は元ブ、ハヌバ⁽¹⁰⁾の屬性にして、ゴダにてはこの神その妙舌⁽¹¹⁾を以て三界を蔽ひ、清亮の聲⁽¹²⁾を有してその聲に神力ありといふ。この神ブ、ハヌバは言語の神として女神ブ、チ⁽¹³⁾と聯絡し、サラスワテ、と同性を有し來りしが故に、サラスワテの舌⁽¹⁴⁾といふ事は佛の廣長舌と同じく、偉大と信實との義となれり。佛隨が廣長舌と共に八音を具へ⁽¹⁵⁾て、梵音可愛といへるも、この神話に負ふ所ありしならん。

佛身が金色なりとは、前に述べし處なるが、此は諸神の屬性にして、醫王の關係にて佛隨に關係あるアシキンは、多く金色を以て稱せられ、⁽¹⁶⁾スルヤ⁽¹⁷⁾が光輝を以て稱せらるゝは云ふまでもなし。後には敘事時にも、大自在天を稱して金眼といへり。⁽¹⁸⁾此等の神話的屬性が佛身に附屬し來るは自然の數なり。

肌皮柔軟が水中蓮華の譬喩と同義なるは前に述べたり。千輻輪はギシヌの足の輪にして、轉法輪の觀念もギシヌの威力及轉輪王の四海統一と相離れず、而してスルヤも亦轉々⁽¹⁹⁾の名あり。眉間の白毫⁽²⁰⁾も亦ギシヌが胸に有する二印象⁽²¹⁾に相似たり。クンは之を太陽運行の表象なりとす。

三十二相に次ぎて八十種好⁽²²⁾あれど、今一々敘せず。その中に佛隨が鷲の如く行くといへるは、恰もスルヤが鳥の如く⁽²³⁾又雉の如し⁽²⁴⁾といへるに同じ。此等の

- (1) 下 p. 261.
 (2) S. N. IV. 1. 8. (Vol. I. p. 106-107.)
 同本 雜阿 三十九 (辰四 24b.)
 ” 別雜 二 (辰五 9.)
 Yo suñña-gahāni sevati,
 seyyo so muni attasaññato. (續)

材料も亦古神話に出てしなり。

要するに佛徳の譬喩的讃歎と佛傳の神話化は、材料を古神話と民間説話にとりて、逝きし佛隨の偉大なる人格を神人に化し、具象的に又通俗的に寫象せんとせし結果なり。此の如き譬喩叙説は所謂大乘佛典にては大に發達したり、而もその大體に於てはこの三十二相等の叙説に異ならず、迦華喩、月喩の如き、皆その儘に存す。金光明經の讃歎⁽¹⁾の如き、その中の諸相皆所謂小乘教典の中に存在する者なり。大乘小乘の區別なく、此の如く付て在世の現實なる佛隨に代ゆるに神話的の神人を以てせしは、何れにか不滅の佛身存在を要求して、その觀念を明かにせんとせし不識の衝動に出て、之を具象的なる神人の相好に求めしなり。已に譬喩と事實とを混じて、佛身は此の如く金色にして世相以上なりと信ずる以上は、その佛身は又自ら世の毒害に害せられず、轉輪聖王と同じく時々世に出現し、その出沒以上に不滅の金光を有する妙好身ありとの信仰を生ぜざるべからず。而して此の如き信仰は、已に多少現實の佛身に關しても有る者の如く、その精神が世の紛々に動かされざる如く、その身體も亦諸害に犯されずといへり。雜阿⁽²⁾に曰く、

家を空うして修行する人は、

又それよりも優れて(心にて)自ら知る寂者なり、

猶如空宅舍

牟尼心寂靜

(1) vossajja careyya tattha so
 paṭirūpaṃ hi tathāvidhassa taṃ.
 carakā bahū bheravā bahū,
 atho daṃsā sirimsapā bahū,
 lomam pi na tattha iñjaye,
 suññāgāra-gato mahāmuni.
 Nabhaṃ phaleyya pathaviṃ caleyya,
 sabbe pi pāṇā uda santaseyyuṃ,
 sallam pi urasi pakampayeyyuṃ,
 upadhisu tānaṃ na karonti buddhā.

(2) 增阿 二十一 (夙二 2b, 3a.)

① かれは自ら空しうして其處に行ず、
 此の如き人としてかれを拜せよ。
 遊行多ければ畏れ多く、
 蠅類多く、蛇類多し、
 其處にても寂者は毛をも動かさず、
 家を空しうしたる大なる寂者は、
 雲を割き地を動かす(が爲に)
 他方一切衆生は戰慄するとも
 (又その胸にて矢を動かすとも
 (此等)状態にて諸佛は防ぎをなさず。
 この言は現實肉身の佛隨を離れざるも、而も先に無常死滅を以てその死を説明
 したる信仰に比すれば、神人の神話が形體的ながらに、如何に佛身不滅の要求を滿
 足すべき方向に向ひつゝありしかを見るに足るべし。而して此の如き佛身不滅
 を幾分か抽象的に見しは、增阿①の佛身不思議の叙説とす。その文に曰く

如來身者清淨無穢受諸天氣爲是人所造耶。
 如來身者爲是大身、如來身不可造作、非諸天所及。

於中而旋轉
 佛身亦如是

無量凶惡龍 蚊虻蠅蚤等
 普集食其身 不能動毛髮

破裂於虛空 傾覆於大地
 一切衆生類 悉來作恐怖
 刀矛槍利箭 悉來害佛身
 如是諸暴害 不能傷一毛

如來身者不可摸、則不可言長短、音聲亦不可法。

恰も是れ大衆部の宗義が佛身の無邊をいふに同じく、具象と抽象との間に彷徨して、佛身の無限超越的存在を求めし跡を示せり。

佛徒は如來身の不滅に想到したるも、その觀念は尙進て半具象的神話的不滅を越えて、更に過境の常住佛身を求めざるべからず。佛徒は如何にしてこの要求を満足したるか。

第七章 法と佛との致一

第七章 法と佛との致一。

法身佛の觀念。

佛滅後、佛隨の人格に代はるべき歸依の對象は、法歸依、自歸依を以て始まりしも、
 すが少しく抽象に過ぎて、現實の要求に副はざりし爲め、一般の信仰は上座の傳承
 と相助けて經文の崇拜となり、その他佛出現の信仰、遺物、塔寺の崇拜となり、又神話
 的に佛身の不滅を信ぜんとしたり。而も形而上的要求はこの間にも常に進歩し
 て、一方には神話的に佛隨を神化して之を崇拜せしと、並に他方にては此等總ての
 歸依の本據を明かにし、佛陀が體得し宣布したる達磨即ち菩提の眞實體を求めん
 とする傾向は、抑ふべからずして、終に法と佛と致一にして、佛隨とそが體現したる
 眞理即ち法とを合一するに至れり。

法身の觀念は、要するに教法を以て佛隨の人格に代ふるの信仰歸依が、その必然
 にして普遍形而上の根據に進み、深き意味にての法、即ち眞理の本體を佛隨の形而
 上の實體とするに至りしなり。即ちこの法は佛隨成道の根抵、佛隨が體現して吾
 等に宣示し、又同一道によりて吾等に體得せしめんとする眞理智慧にして、諸佛成
 道の大本もこの法にあり、諸佛の智慧菩提といふもこの法なり。佛隨が自ら絶對

(1) 四十四 (灰三 34b.)

參照 增阿 二十七 (灰二 38b.)

如來正法亦當盡

(2) 辰七 6a, 15b.

(3) 灰三 4a.

の眞理を得たりと自覺し、弟子等亦佛陀の人格的感化によりて佛陀を師主と仰ぎ、如來と信じたる以上は、その所謂る法なる者は單に口舌の說法、文字の教法に止まらずして、佛智の本源、衆生成道の大本、又直に超世不滅の實在ならざるべからず。

法身佛の觀念は、法の過境的本體を、佛陀と及びその人格に現はれし教法とに求めしに出づ、而もその觀念發達の始めには、法に關する概念が尙具象的なる状態にありしは、已むを得ざるの勢なり。過去諸佛の教法が早く己に返滅せし如く、釋迦佛の教法も亦滅せんとの憂慮は至る處に現はれ、增阿には、佛は迦葉に命じて將來佛の出現を待たしめしといひ、本行集經にも同じく、過去佛の法も滅したる如く、釋迦牟尼佛の正法は五百歳にして滅し、像法亦五百歳にして滅すといへり。法華經等大乘經典に入りても、この憂慮の盛なる者あり、正像二法の別、或は未法附屬の信仰、皆具象的に教法を以て佛隨に代ゆるの思想に基きて出でし憂慮なり。この反動として、又他方には釋迦佛の法のみは永く存すとの信仰をも生みたり。增阿三十六の佛の言として記せる者に曰く、

過去諸佛世尊取滅度、遺法不久存於世、我復重思惟、以何方便、使我法得久存在世、如來身者金剛之數、意欲碎此身、如芥子許、流布世間、使將來之世信擅越、不見如來形像而取供養。

(1) 辰三 33b.

(2) 辰一 3a.

(3) 增阿十五 (辰一 63b.)

參照 大般涅槃經二 (盈五 11a.)

如來身者即是法身非爲食身

同 三 (盈五 16b.)

如來是常住法不變易法如來此身是變化身非雜食身

大般涅槃經 三 (盈五 17b.)

如來身者是常住身金剛之身非雜食身即是法身

(4) 雜阿 二十三 (辰三 37a.)

同本 Divya-avadāna XXVII. (p. 396-397.)

同本 阿育王經 (藏十 36a.)

Div.-av.

yat tac-chariraṃ vadatīṃ varasya

dharmātmano dharmamayaṃ viçuddham

dharmapradīpo jvalati prajāsu

kleṣa-andhakāra-antakaro yad adya.

阿育王經

佛世尊法身

清淨無與等

其然佛法燈

除諸煩惱闇

是れ即ち法華に於ける無量分身の思想にあらずや。茲に所謂る法は未だ十分に超世的の法にあらずして、寧ろ教法或は經文の義なりと雖も、それをして永く世に存せしめんとの希望も明かに、又多少佛と法とを一致する傾向を代はせり。この意義にて佛身の永存を望める者再び增阿四十四の存す、曰く、

過去久遠諸佛滅後教法不久存世……我滅度後法當久存。

我釋迦文佛壽命極長、所以然者、肉身雖取滅度、法身存此。

と。而して增阿編輯の目的は、即ち此の如き佛の教法、即ち法身を永久に存せしめんが爲なり。その序文に曰く、

釋師出世壽極短 肉身雖逝法身在 當令法本不斷絕 ……………

如來法身不敗壞 永存於世不斷絕

今迄は佛陀を本位として、佛陀の教法なるが故に法を信じたる佛徒は、今や法に於て假令具象的に訓誡典籍の謂ひなりしにもせよ、佛の不滅永存を求めたり。此に於て法本、法主、法根なりし如來は、その法に於て不滅を得、而してその不滅存在は佛身の實在根抵となりぬ。

如來身者以法爲食。

如來之體身 法身性清淨 ……………

法燈常存世 滅此愚癡冥

- (1) 雜阿 二十四 (辰三 40a.)
- (2) A. N. V. 201 (Vol. III, p. 217.)
A. N. VI. 40. (Vol. III, p. 310.)
Idha Tathāgato parinibbuto, bhikkhū
bhikkhuniyo upāsakā upāsikāyo Satthari sagūravā
viharanti sappatissā, dhamme....., saṅghe.....,
sikkhāya , appamāde.....,
paṭisanthāre Ayaṃ hetu, ayaṃ (概く)
殆ど同文。S. N. XVI. 13. (Vol. II, p. 224—225)。
尚その前に Na tīva saddhammassa antaradhānaṃ hoti yāva
na saddhammapaṭirūpaṃ lokaṃ appajjati.
- (3) 同文。上記 S. N. と 同本雜阿三十二 (辰三 86a.)
別雜 六 (辰五 42ab.)

○ 如來所說無量無邊名句味身亦復無量無有終處。

此等の文にて法といふは尙教法の義なり。第二の文の如きは明かに阿難が受持したる法がこの世に保存せらるべしとて、法燈世に存し、如來の智慧海永く世に忘れられざるをいへり。而もこの法が即ち佛身にして、佛身の基なる此法、智慧は無限常住なり。さればこの思想の結果は、法を以て單に說法經典に現はれたる現象の法とするに止まらず、佛弟子等がその教法訓誡に基きて如法に修行する事は、即ち佛の教法が活力を以て永存久住する者なりとの信仰に轉ぜざるべからず。佛敎の生活力は佛徒の佛陀に對する信仰にあり、而してこの信仰は即ち佛陀自身の悟道修行を弟子等の間に實現するの力なり。されば、教團の四衆佛徒が佛陀の教訓に隨順して、法燈明自燈明に如法修行せるは、即ち佛陀の教法が一々の說法乃至經典を超えて、その眞正の生命を發達しつつある所以なり。

○ かくて如來が般涅槃したる後にも、比丘

比丘尼優婆塞、優波夷が敬重隨順して如來の中に住し、法の中に、教團の中に、不放逸の中に、調和の中に住す。この因、この

○ 若比丘於

大師所恭敬尊重下意供養依止而住、若法若學若隨順教若諸梵行、大師所稱歎者恭敬、住、是名五因緣。

- (1) paccayo, yena Tathāgato parinibbuto
saddhammo ciraṭṭitiko hohi.
- (2) S. N. 及漢文同本 同上。
- (3) 尺二 53/4.

参照 佛所行讚離車辭別品 (藏七 72ab.)

無有變遷者	此則爲解脫	於何而更求
汝及餘衆生	今於我何求	汝等所應得
我以為說竟	何用我此身	妙法身長存
我住我寂靜	所要唯在此	

(4) 盈

緣によりて、如來が般涅槃したる後にも、

(その)正法は久住となる。

如來法律不沒、不忘、不退。

此の如き法こそ、惡人の不正法に沒せらるる外には、水地にも沒せられず火風に
も冒されざるの久住の法なれ。如來の感化力が存する限り、即ちその悟得と修行
とが人心を靈化し得る限りは、不滅の法にして、佛の正法が久住するは、要するに佛
陀自身の力なり。此故に弟子の修行、救團の永續の中に正法の久住を信じ得る者
は、又即ちその中に佛陀自身の久住を認め仰ぐべし。增阿三十一の佛陀が救護
忍、法説、義説、將護衆生、求無上正眞道の六徳に於て無限無厭足なるを説き、この六法
が即ち色身以上の佛陀の本身なりとて

如來身者眞法之身、欲更求何法

といへる者は是れなり。大乘の涅槃經に

以能正法因緣故、得成就是金剛身

といへるも、此の如き正法身、久住佛法の義に外ならざるなり。

此に於て問題は自ら哲學的に、此の如く佛陀の感化と共に久住する法とは抑も
何者にして、何に基きて此の如き久遠の生存を有するやといふ點に向はざるべか
らず。佛陀は自ら菩提無上登に到達したりと信じ、弟子はその佛陀を信じ面して

- (1) 雜阿 十二 (長二 69a)
- (2) S. N. XII. 65. (Vol. II. p. 106-107.)
 Evam eva kvāham addasaṃ parāṇaṃ maggaṃ parāṇaṃjasaṃ
 pubbakhehi sammāsambuddhehi anuyātaṃ
 Tad abhiññāya ācikkhiṃ bhikkhūnaṃ.....
 tayidaṃ.....yāvadeva manusshehi suppakāsitaṃ.
- (3) 同本 雜阿 十二 (長二 65a)

如來の遺弟は、佛道の靈力に佛隨正法の永遠なる生命を發見したり。然らばその法は佛陀と共に生ぜし者なりや。師なくして自覺せしといふ佛陀は、その菩提眞理の作者にして、その眞理には三世に亘る根據なきや。一比丘は曾て明かに佛陀の前にこの問を提出したり、而して佛陀は比丘の問に答へて曰く⁽¹⁾

緣起法者非我所作、亦非餘人作、然彼如來出世及未出世、法界常住、
 彼如來自覺此法、成等正覺爲諸衆生分別演說、開發顯示。

蓋し菩提到達の眞理が永遠の眞理なる事は、佛陀の自覺信仰としていふまでもなし。然れば過去久遠の時にも、未來永劫にも、この眞理は存し、この法は人を動かすべく、一切三世諸佛とは即ちこの眞理の悟得者に外ならず。この故に師なくして自覺したる佛陀も、その菩提道は永遠なる道、古人の踏みし道を得しに外ならず。

⁽²⁾ 此の如く我れは見ぬ、古人の道、古き跡を、
 古來の等覺者が行きし(道)を發見しぬ。
 ……之れを覺知して比丘……に明かしぬ。
⁽³⁾ 今我如是得古仙人道、古仙人迹、
 古仙人跡、古仙人去處我隨去、
 我於此法自知自覺、成等正覺、
 爲比丘比丘尼、
 彼諸四衆……開示顯發……

又……多人常人にその儘に明かしぬ。
 此故に佛陀は又涅槃に到らしむるの道を説き來て、次て曰く、

- (1) A. N. IV. 25. (Vol. II. p. 26.)
 Esa maggo mahantehi anuyāto mahesihi.
 ye ca tam paṭipajanti yathā Buddhena desitaṃ,
 dukkhass' antaṃ karissanti, satthū sāsana-kārino.
- (2) S. N. 47. 18. (Vol. V. p. 167-168, 暹 Vol. V. p. 181-182.)
 同本 雜阿 四十四 (辰四 56a), 別雜 五 (辰五 34a).
 Ekāyanavāyaṃ maggo sattānaṃ visuddhiyā,
 sokaparidevānaṃ samatikkamāya, dukkhadomanassaṇaṃ
 atthaṅgamāya, ūyassa adhiḅgamāya, nibbānassa
 sacchikiriyāya.....
 Ekāyanaṃ jātikkhayantadassi
 maggaṃ pajānāti lūtānukampi;
 etena maggena atariṃsu pubbe,
 tarissanti yo taranti ca oghaṃ.
- 同文 S. N. 47. 44. (暹 Vol. V. p. 198-199.)
 同本 雜阿 二十四 (辰三 39b. 省略せり).
 A. N. VI. 26. (Vol. III. p. 314.)
 同本 雜阿 二十 (辰三 14b-15a.)
 雜阿 十九 (辰三 11b), 同本 S. N. 52. 1. 之を缺く。
 (以上同文の中或は偶なきもあり。又或は之を佛障成道時の思惟とし或は説法とす
 る等の別あり。ekāyana が ekayana となれるあるも二者同義なり。又 A. N. の
 文及同本なる雜阿二十には附加あり。)

この道は大なる大仙人が行きし道なり。
 佛陀が説きしまゝにこの道を履む人々は、
 苦の終りをなし師の教へを成就する人々なり。

然らば即ち今の佛陀が體得實現したる道は、過去佛陀成道の源泉にして、又衆生
 度脱の因由なり。一切の道法はこの三世貫通の菩提道にして、佛陀の教法は即ち
 この眞理を體現したる法なり。佛の法が佛弟の如法修行六法によりて久住する
 といふも、歸する所は、この永遠の法の存するが爲なり。三世一切の衆生が佛道を
 修し、佛果を現するは、この一貫一途に出づ、即ち一乗の道なり。故に曰く、

一 有 一 乘 道 淨 諸 衆 生
 離 諸 惱 苦 憂 愁
 悉 滅 得 眞 如 法

謂 有 一 乘 道 見 生 諸 有 邊
 演 說 於 正 法 安 慰 苦 衆 生
 過 去 當 來 …… 諸 世 尊
 現 世 尊 正 覺 乘 此 度 海 流

この道は一途にして衆生の淨化の爲めに、
 愛へと痛みとの絶滅の爲めに、苦と愁との
 消滅の爲めに、知の到達の爲めに、涅槃の實
 現の爲めに(の道なり)。…(偈に曰く)、
 生の滅の終局を見たる人は、一乗の
 道を知る(この人は慈悲の人なり)。
 この道によりて過去諸佛は度りたり、
 又かれ等は流れを度らん又現に度る。

- (1) 增阿 二十三 (灰二 15a.)
- (2) 增阿 三十七 (灰三 6b.)
諸佛世尊皆同一類。同其戒律解脫智慧而無有異，亦復同空無相願。參照 法蘊足論二 (灰四 9b.)
- (3) 上 p. 80—81.
- (4) A. N. IV. 41. (Vol. II. p. 21.)
同本 雜阿四十四 (灰四 56a. 先の一乘道の前經)，別雜五 (灰五 34a.)
- (5) ye e' abbatitā sambuddhā ye ca buddhā anāgatā,
yo e' otarāhi sambuddho bahunnaṃ sokanāsano,
sabbe saddhammagaruno vihaṃsu viharanti ca
attho pi viharissanti, eṣā buddhāna dhammatā.

參照 S. N. 56. 24. (暹 Vol. V. p. 403.) 同本 雜阿十五 (灰二 87b. 省略)。
諸佛の成道が法に基くといふ思想は大乗にありても保存せられ發揮せられ
たり。般若經が六波羅蜜を以て此の如き法なりとするはその一例なり。

Astasāhasrikā Prajñāpāramitā (ed. Mitra p. 336.)
同本 摩訶般若波羅蜜經八 (月六 75a. 及道行般若經七 (月六 32a.)
Yo' pi te' tilo' dhvāni Tathāgatā arhantāḥ samyaksambuddhā
anuttarāṃ samyaksambodhiṃ-abhisambudhya.....; bhaviṣ-
yanty-anāgate' dhvāni Tathāgatā..... a. s. abhisambhota-
yanto.....; aprameyasy-asaṅkhyeyasy-aparimāṇasy-acinty-
esu lokadhātūṣu Tathāgatā..... etarhy-a. s. abhisambud-
dhās-tiṣṭanti.....; aham-api Tathāgato' rhan samyaksam-
buddha etarhy-a. s. abhisambuddhaḥ. Mana-api hi ito nirjāta-
eva sarvajñatā yud-uta saḍbhyāḥ pāramitābhyāḥ..... Tasmāt-
tarhi bodhisattvasya mahāsattvasya saḍpāramitā eva kalyāṇa-
mitrāpi veditavyāni. Saḍ-eva pāramitāḥ gāstā,..... mārgaḥ,
..... ālokaḥ,..... ukā..... avabhāsaḥ,..... trāṇam,
..... cāraṇam,..... lyaṇam,..... pariyāṇam,.....
dvīpaḥ,..... mātā,..... pitā, saḍpāramitā jñānāya bodhiya
sarvajñatāyai anuttarāsamyakambodhiprāptaye samvartanti.

過去諸佛皆從六波羅蜜生。未來諸佛皆從六波羅蜜生。現在十方
無量阿僧祇世界諸佛皆從六波羅蜜生。..... 得阿耨多羅三藐三
菩提。..... 是故當知。六波羅蜜 (是菩薩善知識)，是大師，是父，
是母，是舍，是歸，是洲，*是救，是究竟道，六波羅蜜利益一切衆
生。

- (6) 雜阿 三十四 (灰三 99b.)
- (7) 上 p. 80—81.
- (8) 中阿 阿奴波經 (灰六 34.)

* この洲の語につきては 上 p. 170 參照

三世一貫の菩提道が永遠なる以上は、三世諸佛一切求道者の法は、又一貫不變に
して、佛陀の自覺は法の形而上的根底を離れて存し得ず、戒、定、慧、解脫の四法はその
成道の因縁、この故に諸佛世尊はその根底を同じうし、その類を一にして異なる
なし。① 現身遊行の釋迦佛陀は即ちこの一乘道の體現者にして、その法は從て單
に說法經典の上に現はれたる教法にあらず、實にこの一乘道その者三世成佛道の
真理その者なり。法は世尊に基き世尊に歸する②といふは、先づ佛陀の人格に信
を起し、その信に依りて法を伺ひ得たる信仰の表明にして、之を哲學的思考、形而
上の冥想の上より云へば、世尊佛陀は悉く法の所生なり。故に曰く③

過去の諸等覺者も、未來の諸等覺者も、
又多くの人の憂を除く現在の等覺者も、
總て正法を重むじて住したり、又住す、
又住せん、是れ即ち諸佛の法性なり。
衆生が無數なるだけ成道の諸佛も又恒沙無數なり。④ 而も佛隨としては一乘
一貫にして、法に基き、法を重じて如來たり、⑤ 法を以て本體となし、諸法真理を知り
究めたる諸佛如來は、即ち法と一體なり。⑥ 而も現在佛徒がこの理に到達し得た
るは、現身佛陀の人格に基き、その覺者師主なる人格を信じたるによりて、その法を

過去等正覺 及未來諸佛
現在佛世尊 能除衆生憂
一切恭敬法 依正法而住
如是恭敬者 是則諸佛法

(1) Itivuttaka 112. (p. 122.)
yañ-ca Tathāgato.....etasmim antaro bhāsati lapati nid-
disati, sabban-tam tatheva hoti, no aññathā, tasmā Tathāgato
ti vuccati. Yathāvādi Tathāgato tathākāri, yathākāri Tathāgato
tathāvādi,, tasmā Tathāgato ti vuccati.

(2) 增阿二十 (庚- 87a.)

參照 Itivuttaka 92. (p. 91.)

Dhammam hi so bhikkhu passati, dhammam passanto mam
passati.

(3) 增阿序品 (庚- 3a.)

(4) 同二 (庚- 6b.)

如來身を慧身と致一にするは、即ち第一章に示したる佛陀が自
覺の自然の結果、又その完成なり。次の偈は特にこの關係を明
かにす。

Lalita-vistara XXVI (p. 436-437.)

同本 方廣大莊嚴經 (雷四 56b.)

Anālayam nisprapañcam,
anupādāma-asambhavaṃ,
viviktaṃ prakṛti-ṣūnyam,
dharma-cakraṃ pravartitam.

無處無戲論
無生亦無滅
體性空寂靜
轉如是法輪

.....
Svayam mayā-anubuddho' yaṃ
svabhāvo dharmalakṣaṇam ;
ṛto' para-upadeṣena
svayambhūṣ-tattha cakṣumān.
sarva-dharmavaṣi-prīpto,
dharma-svāmi nirucyate.

.....
一切法體性
我自已覺悟
不從他覺悟
名曰自然人
得於法自在
故說爲法王

信じ得たるが故なり。然れば現身佛陀の肉身が散滅して、その音容復接すべから
ざるに及びても、その信仰を永續せんとしたる遺弟が信仰と考察との結果、この現
身佛の本體は法にありとするに至りしは決して偶然にあらず。法界といひ、法と
いひ、道といひ、一乘道といふ者、皆是れ諸佛正覺の依止なり。この如真真如の法を
體現したる覺者は即ち如來にして、眞理を得たる慧者たる佛隨の人格の上には、
菩提眞理その者は十分に實現せり。故に佛を見ん者はその中に法を見るべく、法
を見ん者は即ち佛を見るなり。

④ 己其觀法者觀我、已行法則有我。

⑤ 於法當念故、如來山是生法典成正覺。

此に於て佛身の不滅は、法の常住なる本體に於て發見せられ、佛と法と融通一致
の根底に立ちて佛教の信仰は佛の中に法を求め、法によりて佛となるべきを明か
にしたり。同一成道の理想は、此に於て永遠なる形而上的意義を發揮したり。名
は身といひて、元は具象的に佛身を考察せし跡を存するも、その身とは現象の身に
あらずして常住の眞身なり。如來身の「と法身と慧身とは皆致一なり。佛智菩提
の形而上の本體は教法智慧の本源にして、如來の眞身、不滅の法身なり。一切諸佛
の成道はこの法身の體得にして、凡夫の修行と信と慧とは之を得る方法なり。

- (1) Dhamma (梵 dharma.)
- (2) 上 p. 231—233 等。
- (3) A. N. IV. 180. (Vol. II. p. 168.)
sammukhā metam Bhagavato sutam, sammukhā paṭiggahitam,
ayaṃ dhammo, ayaṃ vinayo, idaṃ satthu sāsanaṃ.
- (4) 上 p. 91.
- (5) 上 p. 241.

此に至て、現身佛陀の自覺自信によりて體現したる法は、形而上的に永遠なる真理の本體として法身佛陀となれるを見る。その宗教的信仰、哲學的考察の經過は、上來の研究にて畧ぼ明かし得たりと信ず。此に附屬して尙一考すべきは、法即ち達磨のなる語の意義と、その意義の中に現はれたる佛教の發達が如何に印度一般の思潮に基けるかにあり。

元來達磨とは所住定道の義にして、婆羅門教にては古くより之を法律又義務の義に用ひたり。客觀的社會的に云へば、社會の規律なる達磨は、主觀的個人的にはその法に従ふ義務なり。佛教にありては、始めより達磨を此と同じき二方面に用ひ之を弘く用ひては、一切の事物現象は皆法にして、狭く云へば佛陀の言説訓練を法と稱す。先に(4)屢ば擧げたる如く、如來の法といへるは、多くは言説の義にして、S. N. (4)に「現前に世尊より聞き、現前に把持したる者、是れ即ち法即ち戒律、即ち師の教へ」といへるが如きは、最も明かにこの義の具象的方面を明かにせり。道て四法成就のその他五法、六法等といふ時には、その事實が一定の因果を有し、その法に従て善惡或は苦樂を生ずるの法にして、即ち因果の不變なる定道に支配せらるる現象なり、即ち法界なり。(5)佛教のみならず、一般に印度思想は、西洋哲學の如く天然法と道德法とを峻別せず、從てこの法といふも、二者を合一してその所住定道ある法

界を稱す。この意義にて、法は儒教の天命或は道に似、佛教にても又實に之を道¹¹⁾と稱したり。この二面の用法は S. N. のに、法の變易¹²⁾として無常變化の現象を指し、「法を樂む¹³⁾」として佛の教法を樂むと相對せる文にて特に明白なり。この二面は相異なる事物の如きも、佛陀を信じたる佛徒の眼より見れば、佛陀は絶対の覺者にして、その言説は一々皆因果の理を透見し、事物の真相に達したる真理なれば、この二面の法は二にして二ならず、佛陀の教法が即ち宇宙の真相なり。一層深く入りて云へば、因果現象の法は變易の法にして諸行は無常なるも、而もその無常現象は各その基く所の永遠の根底ありて三世に亘れる法なり。此故に、此の如きの法は又諸佛成道の因にして、一切の變易を超えたる法體真理なり、而して現在の佛陀その人はこの真理の一顯現に外ならず。現身佛は即ち法身佛なり。基督教の言説にていへば、神の言葉なるロゴスは即ち永遠の真理、この真理ロゴスの現はれが即ち世界萬象にして、その神の實在眞體を天父として吾等に示したる基督は即ち肉となれるロゴスなり。此に至れば佛の法は即ち妙法にして、妙法は即ち永遠の佛身、而して現身の佛はこの法身佛陀の具象權化なり。現身佛に對する信仰が、遂て法身佛の考察となるは、本來自爾の理然るべき者あるなり。この點に於て、世に所謂の大小二乗の區別は、畢竟狹量の偏見より生じたる者に外ならざるを見るべし。

(1) Magga (梵 Mārga 上 p. 81., 90—91.)

Kathāvatthu IV. 6 (Vol. I. p. 281-282).

(菩提と道と滅とを得たる者即ち佛陀。參照上 p. 242-245).

Bodhiyā niruddhāya vigatāya paṭipassadāhāya, bodhiyā atitāya anāgatāya paccuppannāya dukkhaṃ pariñānāti, samudayaṃ pajahati, nirodhaṃ sacchikaroti, maggaṃ bhāveti, bodhipaṭilābhā buddho.

(2) S. N. 35. 136.

(3) dhamma-vipariṇāma.

(4) dhamma-ārāma.

(5) Udāna VIII 3. (暹 p. 168).

Itivuttaka 43. (p. 37).

No ce taṃ abhaviṣṣa ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṅkhatam, nayidha jātassa bhūtassa katassa saṅkhatassa nissaraṇam paññāyetha. Yasmā ca kho attli ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṅkhatam, tasmā jātassa bhūtassa katassa saṅkhatassa nissaraṇam paññāyetha.

參照 Oldenberg, Buddha (p. 326).

A. N. IV. 34. (Vol. II. p. 34).

Itivuttaka 90. (p. 88). 同本 本事經七 (五六 50b).

Yāvata dhammā saṅkhatā vā asaṅkhatā vā virāgo tesam aggaṃ akkhāyati, yadidaṃ madanimmaddano pipāsavinayo ālayasamugghāto vaṭṭupacchedo tanhakkhāyo virāgo nirodho nibbānam.

於一切施設法門、(世間出世間、)爲無爲等、諸法門中涅槃最勝、諸離惱慢、息諸渴愛、滅阿賴耶、斷諸徑路、愛盡離欲、寂靜涅槃。

- (1) *Ṛta* (参照 上 p. 246 *Lalita-vistara* の例)。
- (2) Dalhmann, *Der Idealismus in der ind. Religionsphilosophie.*
- (3) *Mahānārāyaṇa-up. XII.*
Ṛtaṃ satyaṃ paraṃ brahmapuruṣaṃ.....namo namaḥ.
- (4) 同上. I. 6.
Tad-eva-ṛtaṃ tad-u satyam-āhur,
tad-eva brahma paramaṃ kavinām
参照 同上 LXII. 1 と 7.
satyaṃ paraṃ dharmāḥ paraḥ.
- (5) *Bṛhadāranyaka-up. I. 4. 14.*
Vai sa dharmāḥ satyaṃ vai tad.....otadd-ha-eva-ctad-
nbhayaṃ bhavati.

佛教にてこの本來自爾の本義が發揮せらるるには、上來研究の示すが如く幾何かの變遷を要したり。而もこの本義は、印度にて佛教に至りて發揮せられしにあらずして、佛教以前のウパニシド哲學、并に佛教の興起と前後したるキーターの哲學宗教にて十分に發揮せられたり。此等婆羅門思想が達磨を法律義務の義に用ひたる事は、法典等一般に古印度の文書に十分明かなれば、今一々叙説するに及ばず、佛陀がその教法を稱して達磨といひしも、全く婆羅門の言語を襲用せしなり。而して婆羅門思想は佛教と同じく、一々の現象の中に實在の能動を認め、現實の中に不變性を求めしかば、祈禱の中に神力を認めて祈禱祭事を直に實在なる梵とせし如く、此等義務に隨順したる如法實行の中に真理實在を發見し、一々の達磨正行の中に最上神の發動を認めたり。是れウパニシド哲學の特色にして、*タールマン*の所謂祭事表象より祭事神祕を求めたる思想なり。(1) 故に曰く

- (1) 最上真理梵本體なる正行……を崇めよ。
 - (2) 是れ即ち正行なり、是れを真理と稱す。
 - (3) 是れ即ち諸賢者の所謂最上梵なり。
- 而して此等の正行行事は、弘く見れば達磨にして、
 (4) その達磨は即ちその真理なり。……二者は即ち同一なり。

- (1) Gītā IX. 31.
kṣipraṃ bhavati dharmātmaṃ caçvat-çāntiṃ nigacchati.
- (2) Gītā. XIV. 27.
Brahmaṇo hi pratiṣṭha-alam-amṛtasya-avyayasya ca
çāçvatasya ca dharmasya sukhasya-ekāntikasya ca.
- (3) Gītā IX. 2—3.
Rājavidyā rājaguhyam pavitram-idam-uttamam,
pratyakṣa-avagamam, dharmyam susukham kartum avyayam
Açradddhānāḥ puruṣā dharmasya-asya, Parantapa,
apṛīya mām nivartante mṛtyu-saṃsāra-vartmani.
- (4) Bṛhadār.-up. 5. 4.
tad-vaitad-eva tad-āsa satyam-eva.
sa yo haitam mahad-akṣaram prathamajam
veda satyam Brahmaṃ jayati-imā-lokaṃ.
satyam hy-eva Brahma.
- 参照 Taittir.-up. 2. 1.
satyam jñānam-anantam Brahma, yo veda nihilam guhāyam
parame vyomam, so' çnute sarvām kāmām saha Brahmaṇā
vipaçciteti.
- (5) Gītā II. 72.
Eṣā brahmī sthitiḥ, Pārtha, na-enaṃ pṛāpya vimuhyati.
sthitvā-asyām-antakāle' pi Brahmanirvāṇam-rcchati.

されば義務なる達磨を履修して、達磨をその本性とするに至れる者は、その如法の修行によりて、即ち直に久遠の真理、最上の實在梵に合一したる者⁽¹⁾にして、この實在真理は即ち不死常住なる達磨の根柢なり。⁽²⁾此を以て、最上神の化身たるアルジュナは、最深最奥の法を明かさんとするに臨て、曰く

(1) 此は知見の王、秘奥の王、最上の淨道なり、直覺に入るべく、達磨の性にして、行ふに易く、不變なり、この法を信ぜざる人々は、

余(最上神)に達せずして、死の流轉の道に(反復)還歸す。

此の如く法に現はれたる梵は久遠の真理なり。

(2) 此れ即ち此れなり、此れ即ち真理なり。

此の大なる、不滅なる、初生(乃ち久遠實成)なる真理を梵なりと知る人はこの現世に勝つ。……

真理は即ち梵なり。

(3) 此れは梵の住地なり、此に達すれば(人は)復迷はず、その中に住すれば、終りの時にも梵涅槃に到達す。

此く見來れば、ツバニシド思想史の進行と佛教の信仰との間に、驚くべき平行の

(1) 大乘起信論 (來十 38b.)

妄心則滅法身顯現……………

復次眞如自體相者一切凡夫聲聞緣覺菩薩諸佛無有増減非前際生非後際生畢竟常恒從本已來性自滿足一切功德所謂自體有大智慧光明義故遍照法界義故眞實識知義故自性清淨心義故常樂我淨義故清涼不變自在義故具足如是過於恒沙不離不斷不異不思議佛法乃至滿足無有所少義故名爲如來藏亦名如來法身。

如來實知一切衆生及與己身眞實平等無別異故以有如是方便智除滅無明見本法身自然而有不思議業種々之用即與眞如等徧一切處又無有用相可得何以故謂諸佛如來唯是法身智相之身第一議諦無有世諦境界離於施作但隨衆生見聞得益故說爲用。

(2) 佛性論三 (卷二 74c.)

若依毘曇、薩婆多等諸部說者、則一切衆生無有性得佛性但有修得佛性。

經過を見るを得べし。只その相異なるは、佛教は具象的に一人の佛陀に於て、その法の活きたる事實を得、活きたる法、活きたる梵涅槃を信ずるを得、此故に又この現身佛陀の信仰に基きて、その中に、又三世諸佛に貫通し一切衆生に遍滿せる法身佛を得たり。その涅槃の理想は、元は梵涅槃より出てしも、之を梵と稱するの要なく、直に佛陀の人格、永遠の法身佛に涅槃の實現を見るを得たり。現身佛の入滅後、佛徒が現實の佛陀を超えて、その眞法身に到達し、佛陀が自覺したる佛智の眞境を見、此によりて同一修行、同一理想、同一成道の久遠なる大本を明かにするに至りしは、歴史事情の上よりも、信仰思索の上よりも必然の徑路なりしなり。眞如涅槃の法身のと、現身應化の師主と及び衆生信行の菩提と、三にして一、一にして三なり。この三一の深奥義に到達し得たるは、一に佛弟の佛陀に對する信仰に出づ。

現身佛陀が法身佛陀となるに至りし變遷の經過は、此の如くバリーと漢譯との佛典中に十分に現はるるを見たり。その間一方には上座の傳承を重んじて現實に拘泥する者は、終に一切有部の極端なる現實觀となりて、修得佛性、僧中有佛の宗義を組織したり。而も他方にて大衆は、未だ全く現實具象の佛應を離れざるながら、此の如く法身の概念によりて法と佛とを合一して、常住の佛身、一切諸法の

(1) 異部宗輪論 (藏四 76b.) に現はれたる大衆部の佛身論を概括すれば下の如し。

佛の本體を觀じて

諸佛世尊皆是出世 (即形而上) 一切如來無有漏法

となし其相と用とを説きては

諸如來語皆轉法輪 (即常住說法) 佛以一音說一切法, 世尊所說無不如義, 佛化有情令生清淨無厭足心……一刹那心了一切法, 一刹那心相應般, 若知一切法諸佛世尊盡智無生智恒隨轉

(參照 秋 十 1a, 收四 16a, 收九 69a.)

然れどもその佛身は又極めて神話的なり。

如來色身無邊際, 如來威力亦無邊際, 諸佛壽量亦無邊際, ………

佛無睡眠, 如來答問不待思惟, 佛一切時不說名等, 常在定故, 然諸有情謂說名等歡喜踊躍。

一切菩薩入母胎中, 皆不執受羯刺藍 Kalalam 類部曇 Arbudam 閉尸 Peçi 鍵南 Ghana 爲自體, 一切菩薩入母胎時, 作白象形, 一切菩薩出母胎時, 皆從右脇生。

一切菩薩不起欲想恚想害想, 菩薩爲欲饒益有情, 願生惡趣, 隨意能住, 以一刹那現觀邊智, 遍別四諦諸相差別, 眼等五識, 身有染有離染, 色無色界, 具六識身, 五種色根肉團爲體, 眼不見色, 耳不聞聲, 鼻不臭香, 舌不嘗味, 身不覺觸在等引位有發語言, 亦有調伏心, 亦有淨作意, 所作已辨, 無容受法。

(2) 黃九。梵本 Suvāṇṇa-prabha は Hodgeson の蒐集中にあり。著者は之を見ざるを遺憾とす。

根柢を捕捉し、その宗義は一切衆生の中に三世諸佛の智慧界と同じき性得佛性を發揮したり。かれの偈中有佛に對して、此は法中有佛と稱すべく、所謂の眞如法身は茲にその姿を現はせり。所謂の大乗佛教といふも、その大本は此の外に出でず、その經典はこの觀念を裝ふに神話を以てせし者に外ならず。今この叙述を終るに臨みて、大乘の一經金光明經によりて、今迄研究し來りし觀念の發達が所謂の大乗の中に現はるるを示さん。

一時佛隨は王舍城鷲峯山頂なる最淨甚深の法界に住しぬ。是れ即ち一切諸佛の居所にして、又一切漏盡聖者の依止する處なり。佛は此處にて一切の聖者にその大佛智を開顯して甚深不滅の法身を示さんとす。その座には一切佛土現はれて、妙香空に滿ち、光明四邊に遍し。座中の妙幢菩薩獨り心に惟て謂へらく、佛の果報此の如く、佛智境界此の如く不滅常樂なり、然るに何が故に釋迦佛隨はその色身八十にして入滅したるか、如來の壽量果して幾何ぞと。佛は妙幢に告げて曰く。佛の壽量は眞に無限にして不生不滅なり。而も衆生をして佛の光明に愧れしめざらん爲に、その色身入滅を示現し、彼等をして心驚いて法を求めしめんが爲に入

- (1) 上 p. 40—41
以下金光明經の形容を中阿三十二相經 (上 p. 217—219) の三十二相番號と Lalitavistara VII (p. 105—106) の梵文と M. N. Brahmāyu (選 Vol. II. p. 517—518) のパーリ文とに對照す
- (2) 十七。sukṣma-suvarṇavarṇa-cchavi—suvarṇavarṇo.
- (3) 廿六。brahmasvāro—brahmassaro karavikabhāṇi.
- (4) 廿三及廿四。sama-cavāriṇṇad-danta, avirala-danta, ṣukla-danta—cattāḷisa-danta, sama-danta, aviraḷa-danta, susukka-dāḷho.
- (5) 廿九及卅。gopakṣma-netra, abhinila-netra—abhinila-netto, gopakkhūmo.
- (6) 廿八。 (p. 221.) prabhūtatana-jihva—pahuta-jihvo.
- (7) 卅二。ūrṇā—uṇṇā bhamukkantare jātā odātā mudṭālasanni bhā.
- (8) 十一。okaikaromā, ūrdha-agra-abhipradakṣiṇa-avarta-romā—ekekāni lomāni lomakūpesu jātāni, uddhaggāni lomāni jātāni, 'nīlāni añjanavañṇāni uṇḍalāvattāni padakkhiṇāvattāka-jātāni.
- (9) 十九。siṃhavūrvādha-kāya—siha-pubbaṇḍha-kāyo.
- (10) 十六。sthito' navaṇata-pralambabāhu—ṭhito anenamanto ubholi pāṇitalohi jaṇṇukāni parimasati parimajati.
- (11) 上 p. 216—217 の (1)

滅す。而もその實佛隨は消滅せず、その津崖無限の智慧より出づる法は、常に絶えずして世を光被し、佛隨は常は衆生の爲に法を宣示す。

我常在慈山 宣說此經寶 成就衆生故 示現般涅槃。

涅槃とは即ち漏盡梵行智慧禪定によりて到達せらるべく、又一切諸佛一切衆生の成道の根本たる法身に外ならず。この法身或は現はれて報土顯現の應身となり、斯土生活の化身となりて、この法を示す。この佛身には諸勝相具はらざるなし。

- 無上清淨牟尼尊⁽¹⁾ 身光照耀如金色⁽²⁾ 一切聲中最高上 如大梵響震雷音⁽³⁾
- 髮彩喻若黑蜂王⁽⁴⁾ 齒白齊密如珂雪 平正顯現有光明⁽⁵⁾ 目淨無垢妙端嚴
- 猶如廣大青蓮葉⁽⁶⁾ 舌相廣長極柔軟⁽⁷⁾ 眉間常有白毫光
- 右旋宛轉玻璃色⁽⁸⁾ 眉細纖長類初月 其色晃耀比蜂王 昇高修直如金鍍
- 淨妙光潤相無虧 世尊最勝身金色 一一毛端相不殊
- 紺青柔軟右旋文 微妙光彩難爲喻⁽⁹⁾ 行步威儀類師子⁽¹⁰⁾
- 臂肘纖長立過膝⁽¹¹⁾ 四光一尋照無邊 赫奕猶如百千日⁽¹²⁾
- 悉能徧至諸佛刹 隨緣所在覺群迷

此の如き讚歎の中に、佛はその法を説き、諸天善神各頌を捧げてこの法を守護せん事を誓ふ。その法といふは他なし、佛法身清淨不滅にして諸佛の涅槃智慧普一

に歸するの理に外ならず。頌に曰く

如來境界	無能知者	一切諸佛	本來寂靜	一切諸佛	所修行同
一切諸佛	後際常住	一切諸佛	同共一體	是如來法	如來眞身
非所造作	諸佛無生	金剛不壞	内外無礙	示現身相	一切正覺
眞法爲身	法界清淨	是名如來			
一切如來	不般涅槃	前際如來	後際如來	常無破壞	中際如來
種々莊嚴	衆生法界	皆爲利他			

此く見來れば、所謂る大乘も、その經典の莊麗なる詩的構想と雄大なる戲曲的構造とを外にしては、法身の信仰に外ならず、上來觀察し來りし原始佛教と根本の的差別を有せず。現實の佛隨は、佛徒の信仰の中に此の如き法身佛となりしなり。

補 遺 參 照

P. 40-41. 「一切勝者」の偈に參照。

P. 92-93. 「佛と衆生と同一成道」。

P. 244. 「諸佛同一類」に參照。

S. N. XXI. 10. (Vol. II. p. 234), 同本雜阿三十八 (跋四 18b.) に佛陀は弟子に獨一閑居を獎勵し、その修行の理想を説きて曰く、
 Sabbāhībum sabbavidum sumedham, 悉映於一切、悉知諸世間
 sabbesu dhammesu anupalittam, 不著一切法
 sabbamjalham taṇhakkhaye vimuttam, 悉離一切愛 如是樂住者
 tam aham naram ekavihāri'ti brūmi. 我說爲一住
 雜阿三十四 (跋三 103a.), 同本別雜十一, 優陟 (跋五 68a.)
 世尊 覺悟衆生, 一切世間從此道, 衆生正盡苦, 究竟苦邊者, 一切皆從此道出。

P. 48. に參照。

Lalita-vistara I. (p. 4)
 tamonudam sannayaveditaram
 çāntakriyam buddhim-ameyabuddhim,

 sa dharmabandhuḥ paramārthakovidah.

P. 40. 及 43. 「我には師あるなし」以下の條に參照。

Lalita-vistara XXVI. (p. 405-406)
 同本方廣大莊嚴經轉法輪品 (跋四 55a.)
 Ācāryo na hi me kaçcit, 我本無有師
 sadṛço me na vidyate, 世無與我等
 eko aham-asmi sambuddhah, 於法自能覺
 çittibhūto nirāçravaḥ. 證清淨無漏

因故] 不復希望, [皆永盡滅, 畢竟寂靜], 究竟清涼,[不可施設究竟涅槃]是名無餘涅槃,
諸所受皆滅 寂靜永清涼 名無餘涅槃。

P. 152. Muni と Brāhmaṇa との關係参照。

Udāna, Bodhivagga 4. (暹 p. 63).

Yo brāhmaṇo bāhita-pāpadhammo, nihunhiko, nikkasivo yattato, vedantagū, vusita-brahmacariyo, dhammena so brāhmaṇo, brahmvādāṃ vadeyya, yassussadā natthi kubiñci loka'ti.

参照 Gīti V. 6.

Yogayukto munir-Brahma na cireṇa-adhigacchati.

P. 152-153. 「水と土と」の偽文参照。

Udāna VIII. 1. (暹 p. 167)

Atthi tad-āyatanāṃ, yatttha neva pathavi, na āpo, na tejo, na vāyo, na akāsānañ-ca-āyatanāṃ, na viññānañ-ca-āyatanāṃ, na ākiñcañña-āyatanāṃ, na neva saññāna-nāsañña-āyatanāṃ, na'yaṃ loko, na paraloko, na ubho eandimasuriyā; tad-ahaṃ neva āgatiṃ vadāmi, na gatiṃ, na phitiṃ, na entīṃ, na upapattiṃ, appatitthaṃ appavattaṃ anārammaṇam-eva taṃ, esevanto dukkhassā'ti.

参照 Oldenberg, Buddha (p. 326)

P. 244-245. 「三世諸佛と法と」に参照。

S. N. 56. 24 (暹 Vol. V. p. 103).

Atitamaddhānaṃ arahanto sammāsambuddhā sabbo te ariyasaccāni yathābūtaṃ abhisambujjhimsu. Anāgataṃ addhānaṃ abhisambujjhissanti Itarāhi abhisambujjhanti.

参照 雜阿三十四第七經 (頁三 986)

aham-eva-arahāṃ loka, 我爲世間 無上導師
cāstā hy-aham-anuttaraṃ. [當度一切] 眞阿羅漢
.....

P. 42. 及 43. (6)

Jinā hi sadṛṣā jūyeā ye prāptā aṇṇavakṣayaṃ
jitā me pāpakā dharmās-tena-Upaga, jino hy-ahaṃ.

P. 42. 及 43. (5)

Vārāṇasīṃ gamisyāmi, 我往婆羅捺
gatvā vai Kācīnāṃ purīṃ, 於鹿野苑中
andhabhūtasya lokasya 爲盲冥衆生
kartā-asmy-asadṛṣāṃ prabhāṃ.

Vārāṇasīṃ
cābdabhinasya lokasya 擊甘露法鼓
tālayisye 'mṛta-dundubhiṃ.

Vārāṇasīṃ 轉所未曾轉
dharmacakraṃ pravartisyē 無上勝法輪
lokeśv-aprativartitaṃ.

P. 143. 及 P. 194-195. 「無餘涅槃」に参照。

Itivuttaka 44. (p. 38-39.)

同本 本事經三 (頁六 354)

Idha bhikkhu arahāṃ hoti khīṇāsavo vusitavā katakarāpiyo
ohitabhāro anuppattasadattho parikkhīṇa-bhavasamyojano sam-
madaññāvimutto. Tassa idhova sabbavedayitāni anabhinanditāni
sitibhavissanti, ayaṃ vuccati anupādisesā nibbānadhātu.

anupādisesā pana samparāyikā
yaṃhi nirujjhanti bhavāni sabbaso.

諸惑得阿羅漢, 諸漏已盡, 梵行已立, 所作已辦, 已捨重擔, 已證
自義, 已盡有結, 已正解了, 已善解脫, 彼於今時, 一切所受 [無引

明治三十七年十月五日印刷
 明治三十七年十月八日發行

税身佛と法身佛
 定價金七拾五錢

(不許複製)

章者行發	章者作著
	

著 者 者
 發 行 者
 發 行 所
 印 刷 者
 印 刷 所

東京市小石川區指ヶ谷町七十八番地
 姊崎正治
 東京市麹町區富士見町二丁目三番地
 太田資順
 東京市本郷區本郷四丁目八番地
 有朋館
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
 青木弘
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
 株式會社 秀英舍第一工場

發賣元
 大賣捌所

東京市本郷區本郷四丁目八番地
 (電話下谷八一六電報略號二六)
 ●東京 東京堂。上田屋。東海堂。林平。大阪
 堂。若林。名古屋。川湖。久留米。菊竹。長野
 光社。仙台。弘道館。金澤宇都宮。

有朋館

吉岡。柳原。京都。便利
 西澤。新潟。萬松堂。北

BUDDHIST AND CHRISTIAN GOSPELS

Now first compared from the Originals. Being Gospel Parallels from Pali Texts

By Albert J. Edmunds,

Honorary Member and American Representative of the International Buddhist Society of Hangan,
Member of the Oriental Society of Philadelphia.

With Notes and Supplements from the Chinese Buddhist Tripitaka

By Anesaki Masaharu,

Professor of Science of Religion in the Imperial University of Tokyo,
Associate of the Society for Psychological Research.

佛教と基督教との比照、それのみならず學術界、宗教界の難事業なり。本書は平行一致を一々二者聖典の原語より翻譯して、忠實に二教教主の福音を對照す。單に學術上未嘗有の新著たるのみならず、又信仰上の珍寶なり。加ふるに日支佛徒の爲にその聖典の出處と漢文本文とを明かにし、新約聖書日本文の所在を示せり。

是れこの二大宗教が接觸して以來最初の完全なる對照也。日月の并び懸るが如く、帝網の相反映するに似たり。
(注意) 右二書を併せて購讀せらるる諸君は豫約者として、最初に「現身佛と法身佛」御求め時(發行元に限る)その定價を拂ひ込めると共に「佛教と基督教との福音」購買豫約の旨を申込まれるれば、來年四月(前後二ヶ月の遅速なきを保證す)「佛教と基督教との福音」發行の節、その定價の二割を減じて貴需に應ずべし。

▲文學博士姉崎正治著▼

増補
五版

復活の曙光

製本優美高尚總クロイヌ
金文字入四六判四百八十餘頁
コロタイプ版名畫二葉挿入
定價金七十五錢 郵税八錢

●物質文明。形式教育の爲に殺されたる靈は、何れの時、如何にして復活すべきか。「復活の曙光」は現はれたる。光を望む人は請ふ凝視せよ。
この聲に應じて世間は如何に反響したるか、その光りは如何に世の暗を破りたるか。五版發行に及びて、著者の補説と批評に對する答辨とを増補す、干戈の黒雲にも蔽はれざりし。曙光が一段の光彩を添へたるを見られよ。

文學博士 井上哲次郎序
女子高等師範學校教授 文學士 吉田熊次著
兼東京高等師範學校教授

社會的倫理學

菊版洋裝クロイヌ金文字入
定價金八十五錢
郵税金八錢

●道德の諸愈盛にして世人の疑惑益深し。是れ研究法其宜を得ざるに依る。吉田先生多年の研鑽を積み此書を公にす。斬新なる見地至公至平の發案。眞に倫理學界の光明

文學士 加藤 玄 智 著

通 東西比較宗教史

菊版 洋定 郵稅 價金 七拾五 錢錢本

◎宗教は千古の秘密、人生の一大問題なり。其の發展激烈は決して偶然にあらず必ず一定系統の存するなかるべからず。本書筆を原始宗教に起し、佛耶兩大教はもとより、東西幾多の教旨、公平正確に比較研究し以て、修理明晰、筆端縱横、眼光炬の如し。文體平易にして學生の良參考書たるは勿言苟も眼を人生の大問題に注ぐの士は塵右必ず一本を備ふるなかるべからず。

獨國エルンスト、ヘッケル博士原著
日本文學博士男爵加藤弘之校閱并序
日本文學士岡上 梁合編
日本文科大學研究囑託高橋正熊 刻

宇 宙 の 謎

菊版 五 百 餘 頁
總價金 一 金 字 入 製 本
定價金 錢 郵 稅 金 錢

◎十九世紀の智識の總和は生物學なり、各學問の中心進化論なり、十九世紀に於ける進化論は十八世紀に於ける太陽中心説と同價値なり、而して當二十世紀の哲學は應に生物學の一元論なるべし、今、ヘッケル氏は生物學の泰斗にして進化論の領袖たり、タイキン及びバウソウの敬する所、スメンサスの畏るる所、眞に宇宙謎語を解くの任ある碩學なり、此書、職業的哲學者を思倒し、宗教的迷信を掃討す、以て二十世紀文明の洗禮を授くるに足る。

東京高等師範學校教授 文學士 登張 信 一 郎 著

新 藝 術 篇

再版 菊定 價金 五拾 錢

新 科 學 篇

刻近 菊定 價金 五拾 錢

新 政 治 篇

刻近 菊定 價金 五拾 錢

新 教 育 篇

刻近 菊定 價金 五拾 錢

新 人 類 篇

刻近 菊定 價金 八拾 錢

◎形式主義、模型主義、常識主義、科學主義は今の教育界の慘狀也。模範士出で賢士隠れ凡骨跳梁。天才は死す、憤慨は、昨今吾教育界の陋態也。竹風先生、深遠の學、雄萬の才、一筆を振つて、教育の新生を鼓吹し、快刀の光焰を吐くこと無慮一千有餘頁。深遠の學、雄萬の才、健の文相待つて、あらゆる問題を解決する、眞に快刀の亂麻を斷つの概あり。教育者勿論、詩人文學者等苟も思、想問題に着眼せらる、諸君子は必ず精讀せられざるべからず。讀者諸君の便を謀りて全部五冊に分ちて之を刊行せしもの也。

女子高等師範學校教授 文學士 吉田 熊 次 著

西 洋 倫 理 學 史

刻近 菊版 洋裝 クロ 一 金 字 入

◎希臘羅馬は思潮の泉源なり倫理學說パノラマ也。吉田先生大學に在るの日より研究を始め茲に此書成る。眞に斯學研究の好資料附録二箇大哲人の倫理學說批評。

東京帝國文學博士建部 雁 吾 著

西 遊 漫 筆

菊版 洋裝 美 本 定價 金 八拾 五 錢 郵 稅 金 拾 錢

◎是れ水城先生の批評的西洋旅行記。周遊三年、遍歷二十餘國、社會政治宗教教育、燃犀の眼光、照し來りて颯颯然り、天女舞ふ。別に歐山の奇、米水の勝あり、點綴以て趣を成す眞に是れ燈下の好伴件。

文學博士建部遷吾著

目下の 大問題

菊版

定價金貳拾八錢 郵税金四錢

●これ政治家の議にあらず、これ學者の說にあらず、野人の聲なり、獻芹の微言なり。

自序の記する所此の如し、以て本書の性質を知るに足るべし、君國に忠愛の士速に一讀せらるべし。

新歸朝者法學士原田豐次郎著

米國產物世
界分散物別
地圖挿入

米國觀

▲附錄米國移民法原文並に
譯文其の他米國重要事項▼

菊版美本 定價金五拾錢 郵税金六錢

●著者久しく米國に遊び、頗る彼地の事情に通ず、歸來慷慨筆を呵して一稿成る、此篇即ち之なり、奇警觀察、絢爛の彩筆、米國の面目勞瘁として紙上に躍如た

六

り、特に米國外亦策を論じ、米國商人を評し、東洋移民の前途を慨するの章に至りては、議論縱橫、叱咤風生、儒夫爲めに起つ、蓋近來の快著なり、渡米者は無論、學者、學生、實業家、苟も米國の真相を知らんと欲するものは必ず一讀せざるべからず。

東海散士柴四朗著 ●第三版 ●東亞地圖挿入

日露 戰爭 羽川六郎

菊版四百餘頁橫
綴り美術的製本

定價金九拾五錢 郵税金八錢

日露の開戦は我神州未曾有の困難なり、唯其れ海戦は如何、陸戦は如何、露國及び列強の狀態は如何、抑勝の決は果して如何、此書は小説にして小説にあらず、實傳にして實傳にあらず、東海散士が縱橫なる文藝と確實なる事實に寓し平易に明暢に此問題を解決して我國民諸君の一樂を博せんとするものなり。

英國評論主筆ステッド著
法學博士 高田早苗序
法學七 五來素川田
黒澤和雄譯述

最 世界人傑評論

(肖像) 洋裝美本
挿入

定價三拾三錢 郵税金六錢

本書は海軍英雄ネルソンを始め十九世紀の軍人。政治家。文學家。宗教家等數百傑を評臨し且つ各史傳を附したるものなり。評論の剴切文章適興趣味津津々々や口露戰爭は外交商業をして益繁激を極めしめんとす大國民たる者は世界豪傑の眞價を極めよ。

▲佐藤治六著▼

俳界の奇書 俳人の必携 諧 紅 綠 子

洋裝美本

定價金卅五錢 郵税金四錢

本書は俳壇の重鎮佐藤紅綠子の白狀録なり。著者が俳

界に入りて以來の俳稿十六編二千餘句を子規翁が一々叮嚀に添削批評を加へ且つ同門諸子の評點をも稿本のまゝ些の修飾をも入れず版に付し添ゆるに子規翁終焉後配。子規子と芭蕉。俳句の色彩。紅綠漫筆等を以てす。正岡子規子の俳句作法。子規門の真相を知らんには實に必讀の奇書なり。

▲太華先生校訂▼

川柳大全

全二冊
箱入美本

定價金四拾錢 郵税金四錢

●滑稽なること川柳の如きはなし、冷酷なること川柳の如きはなし、痛切なること川柳の如きはなし、ニクくしきラカしさオモシロさ皆川柳の如きはなし、此書は川柳中の古秀句五千餘句を集じ、新年の贈物として旅窓の贈物として汽車船中の贈物として舞年玉として贈物して此川柳大全の如く妙なるはなし。

七

23248

▲文學博士上田萬年校訂▼

淨瑠璃なにはみやけ

袖珍定價廿五錢
美本郵稅四錢

目録	
○御所櫻堀川夜討	○初天神記
○安倍宗任松浦笠	○北條時頼並雪の段
○大内裏大友真鳥	○國性爺合戦
○刈萱桑門筑紫襪	○薦屋道滿大内鑑
○大塔宮囃鏡	

▲文學博士上田萬年校訂▼

元祿時代 輕口はなし

袖珍定價廿二錢
美本郵稅四錢

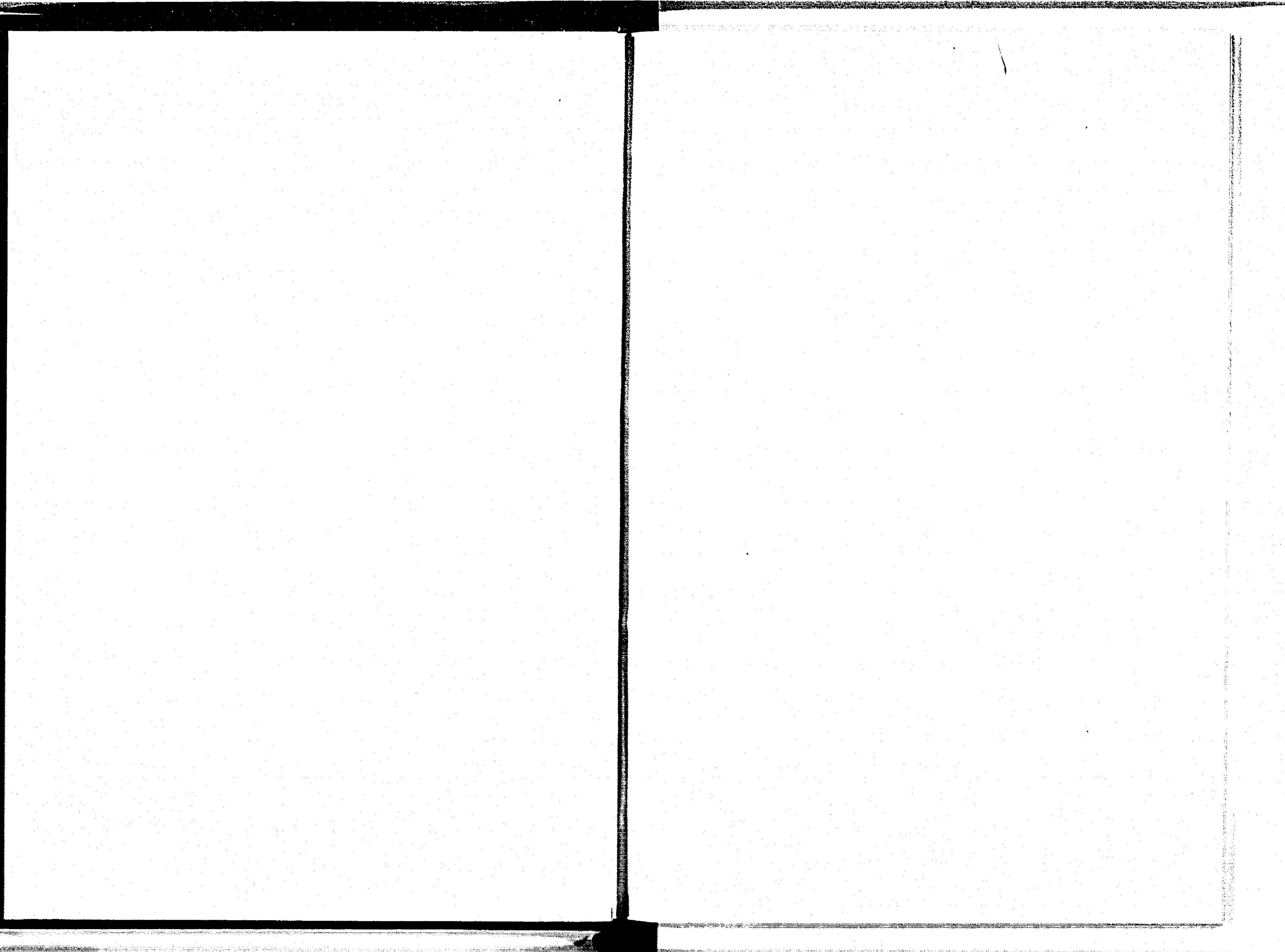
目録	
○醒醉笑	○昨日は今日の物語
○鹿の巻箒	○露がはなし
○輕口あられ酒	○福縁壽
○輕口福とくり	

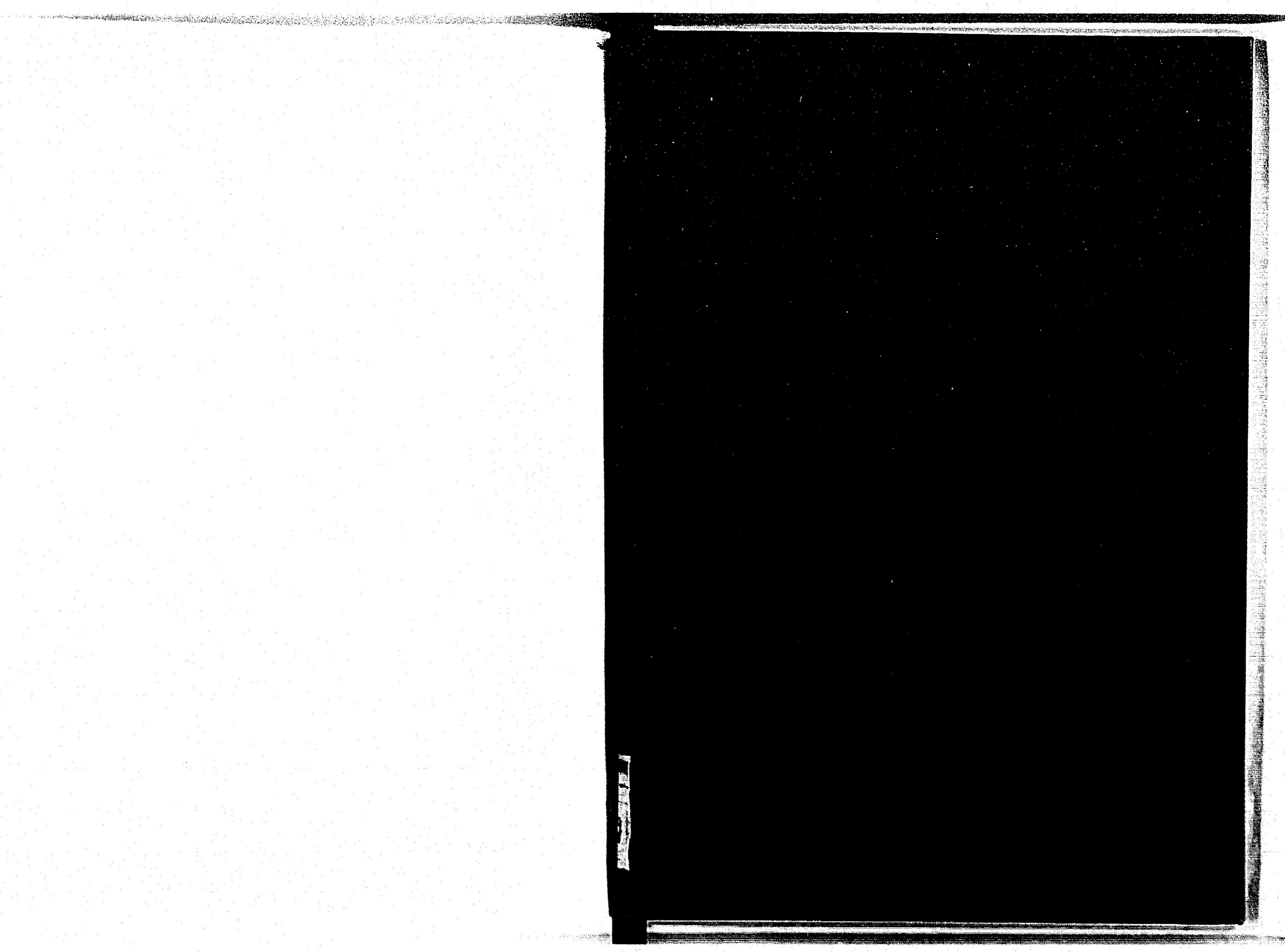
發行所

東京市本郷區本郷四丁目八
電話下谷八百十六番

有朋館

●弊館は博士諸先生を始め内外諸大家の著述に係る圖書を出版するを以て專業とす
○弊館出版の圖書は精良正確にして低廉の價格を以て敏速に供給す○弊館は諸大
家の玉稿に對しては十分の敬虔を捧げ約束を嚴行す
●弊館は出版業の旁、他店發兌の書籍を販賣し、御愛顧の諸彦に對しては勉めて迅速
確實に御用辨致すべくに付陸續御下命あらんことを冀望す





181.
A526g

014873-000-5

181-A526g

現身仏と法身仏

姉崎 正治/著

M37

ABC-0227



